

42192

教科書文庫

4
810
42-1923
20000 65486

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

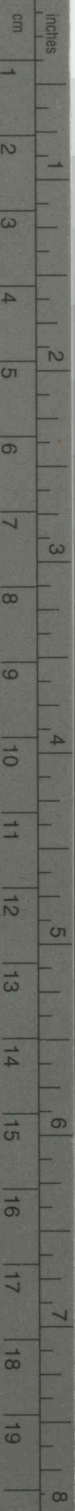


© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



4b
810
大12

新制 女子國語讀本

卷七



46
8107
大12

資料室

文部省檢定

大正二十一年一月二十七日 高等女子學校國語科用

開成館編輯所編

新制
女子國語讀本

株式會社
東京開成館藏版



大原御幸繪卷 (繪光院什物)

新制 女子國語讀本 卷七

目次

一 惜春譜	一	宮 榮	一
二 櫻 諍 (狂言)	六	(續) 狂言記	六
三 忠度都落	一〇	(源平盛衰記)	一〇
四 詩 興	一四	夏 目 漱 石	一四
五 洋樂の鑑賞	二〇	弘 田 龍 太 郎	二〇
六 文化生活の出発點	二四	三 宅 雪 嶺	二四
七 古今千遍讀 (候文)	三三	雨 森 芳 洲	三三
八 古今集歌選 (和歌)	三六		三六
九 歌の新派舊派	三九	與 謝 野 晶 子	三九
一〇 大原御幸	四二	(平 家 物 語)	四二

一一 新緑	池邊義象	一五
一二 妹にさとす その一 (候文)	吉田松陰	一五
一三 妹にさとす その二 (候文)
一四 荒木田麗女	萩野由之	一六
一五 明治大正の俳句 (俳句)
一六 愛兒の死	西田幾多郎	一六
一七 泥人形	和田とみ子	一七
一八 新文學の先驅者	水上瀧太郎	一七
一九 サフラン	森鷗外	一八
二〇 スウイスの山水	吉江孤雁	一八
二一 夏末の接心	杉村楚人	一九
二二 芳流閣上の格闘	曲亭馬琴	二〇
二三 行く川の流	嶋長明	二二
二四 花月草紙抄	松平定信	二五

一 なしと聞けば	...	一五
二 かの人	...	一七
三 わが誠より	...	一八
四 傍よりいふことは	...	一八
五 四つの時	...	一九
六 道路は	...	一九
七 やんごとなき人	...	二〇
八 わが悪しさをば	...	二〇
二五 雨後の月 (口語詩)	千家元麿	二二
二六 み山のしづく その一	小池道子	二三
二七 み山のしづく その二	...	二六
二八 川柳點	金子元臣	二四
二九 落首と落書	本宮泰彦	二四
三〇 家庭と科學	三宅やす子	二五

自修文

一 女性の崇高美……………三島章道…一
 二 母の歌へる（詩）……………茅野雅子…三
 三 一筋の心……………八波則吉…四
 四 桐の葉（和歌）……………三
 五 立海灘から香港まで……………吉江孤雁…三
 六 ウエストミンスターとパンテオン……………河上肇…六
 七 飛行機（詩）……………石川啄木…四

新制女子國語讀本 卷七

一 惜春譜

すべて春は嬉し。おのが身のあたりを繞るもの、色も、形も、人の心も、晴やかに長閑かに甦りて見ゆ。家にありては、あか／＼と日の照る明障子の下に据ゑたる鐵瓶の湯氣の行方も懐かしく、紫檀の机の上に置きたる薄き塵すら憎からず。また戸外に出でては、大路行く電車の輕き砂埃にも、春としいへば、そゞろに心ときめくもをかし。

春の花は梅より數へて桃櫻と呼ぶやうなり。梅は春の魁をなすゆゑに、節操、忍耐、高潔などの美德になぞらへられ、歌にも詠まれ、物

一 宮 榮

一宮榮
 京都の人、
 文部省
 文藝部
 文藝審
 判官、
 大正
 六年
 卒。

語にも称へられ、まことに果報なる花なれども、單に花の眺としては、いと曲なく、親み淺きやうに覺ゆ。梅は冷たき花なり。その冷たさをこそ愛づべけれ。この意味より考ふれば、白梅はよけれど、紅なるは花の性にふさはしからず。名所の梅は、一つには時候いまだ寒きゆゑにや、あらん、行きて見ん心にもならず。行かば必ず風流は寒きものなりて、ふ感を深うせんのみ。すべてこの花のとりにどころは未開の中にあり。殊に清げなる床の間に、一枝、二枝、青白き蕾を疎らに着けたる、またなく嬉し。

桃と櫻とは離れて眺むべき花なり。とりわけ、櫻は、河の堤、山の峰などに、雲の如く數多ありてこそ趣はあれ。一もと庭などにおきては、興深からず。されど、櫻數多あるところには必ず群集あり砂埃ありて、靜かに淡き櫻の興趣の味ひがたき、こそわりなけれ。桃の花は多くは人に嫌はる。花に下品上品の別あるはずなけれ

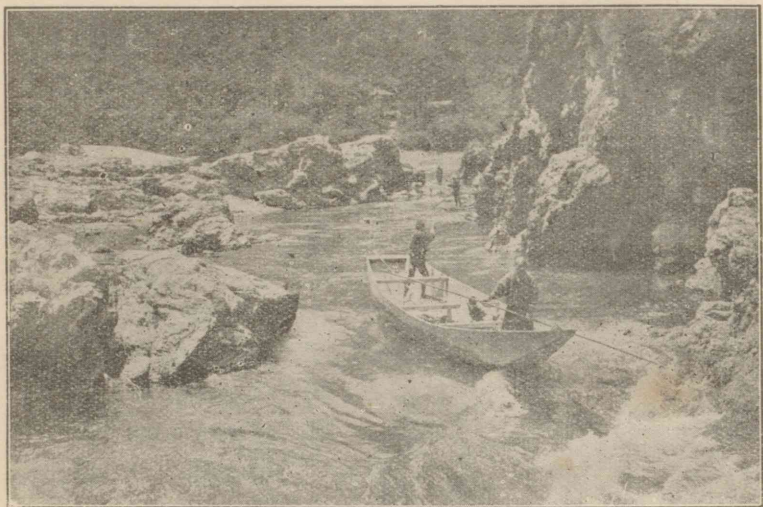
ど、むげに賤しと思はるゝは、花も口惜しとや思ふらん。されど、春の花としては、桃の花の如く艶なるはなかるべし。これを花一輪として見れば、梅花の芳香もなく、海棠の優婉もなけれど、遠く望みて春らしき心地のするものは、桃を措きて他に求むべしやは。靜かなる春の日、家を出でて野邊に立てば、麥は青々と延び、水に飽きたる畑の土よりは陽炎立ち昇る。眼に入るもの、青き野にも、白き小徑にも、小徑行く荷車にも、流るゝ水にも、樹立にも、柔かき春の陽は滿ち溢れ、空よりは雲雀の聲雨の如く降り注ぐ。かゝる時、遠き畑の中の草葺屋根の傍に咲き誇れる緋桃の花こそ、鄙びたるが中にも、いふばかりなくあてやかに美しけれ。すべて春は雨多き季節なり。春雨の趣は古より歌にも詠まれ文にも記されたれば、こゝに言ひ出づる要なけれども、雨と花とは本來敵同志の間柄なるを、奇しくも一つとなりて春の風情をぞ添ふ

る。たとへば、海棠といへば、必ず雨に濡れて悲しげに項垂れたるを思ふ。梨の花また同じ。桃の花の散りたるあと、盛りの折とは引換へて、物憂げに蒼白く寂しげに瘦せたる容、雨の夕などの眺ひとしほ痛ましげなり。また雨の中の躑躅もしをらしきものの一に數ふべきか。庭の築山の石燈籠の蔭、捨石の傍に、何の技巧もなき枝ぶりの、こゝに一もと、かしこに一もとと咲きたる、しみぐと春の静けさを思はしむ。

すべて、さつき、きりしまなどの灌木の類は、下枝の花も、梢の花も、みな一時に咲き一時に凋む。下より咲き昇りて漸次末の花に至る未練がましき他の花の咲きざまに較ぶれば、花の命は短けれどもいと潔し。

七年ばかり前、學校を出でたる年、同窓のもののみ集りて、保津川（保津川）を舟にて下りしことありき。晩春の空、水の如く澄み、兩岸の緑鮮か

保津川
京都府桂川の上流、奇勝に富んでゐる。



保津川下りの光景

なる間を、舟、矢の如く下る。かなたの汀、こなたの岩蔭に咲ける燃ゆるが如き真紅のきりしまの、ゆらゆらと紺青の水に映じたるさま、その美しさは今に忘れられず。その後は、きりしま、さつきなどいへば、必ずかの折のことを思ひ出づることをかしけれ。

春より夏にかけては、周圍の景色の日増しに色濃くなりゆくもすがすがしけれど、わきて我も人も服装の快く美しくなりゆくぞ嬉しき。鶉のやうに着膨れし冬は

過ぎて、醜きは稍美しく、美しきは更に美しくなる。げに、しなやかに柔かき女性のまことの姿の浮き出づるは春なり。女の帯は世に美しきものの一つなれど、真冬の如く、これをコートCoat或は羽織の下に隠しては、縞柄の外に現れぬのみか、身の姿を損ふことおびたゞし。例へば、黒猫にても背中に入れたらんやうに見ゆ。さるを春來れば、羽織・コートCoatの類は、箆箭の底に藏められ、帯のみ獨り精彩を擅にす。この一つだに數へても、春はまことに嬉しき季節とこそいふべけれ。

二 櫻 詠

主^{アト}「これはこのあたりのものでござる。この頃はいづかたも花の盛りぢやと申すほどに、花見に参りたう存ずれども、暇がなさに、参ることもえいたさぬ。最早暇になつてござるほどに、今日

^{アト}能の狂言などで、シテの次の役者の稱。

は花見に参らうと存ずる。まづ太郎冠者を呼びいだし、申しつけう。やい、太郎冠者あるか。

シテ^{太郎冠者}「はあ。」

アト「おたか。」

シテ「お前に居ります。」

アト「汝を呼びいさすこと、別のことではない。この頃は方々の花盛りぢやといへども、暇がなさに、花見にいくこともならなんだ。最早暇になつたほどに、花見にいでうと思ふが、何とあらうぞ。」

シテ「これは珍しいことを仰せられます。この頃は櫻の盛りぢやと申すほどに、櫻を御覧せられるとあれば尤もでござるが、珍しからぬはなを御覧せられて何にさせらる。」

アト「いや、おのれは何事をいふ、櫻も花も同じことぢや。」

シテ「これは頼うだ人も覚えぬことを仰せらる。」左様に仰せ

シテ能の狂言などで、主となつてその抄を行ふ役者。

られたらば、人中で恥をかゝせられう、身共は苦しうござらぬが。
アト「して、汝がそのやうにいふは仔細があるか。」

シテ「なかく、仔細こそござれ。『はな』が見させられたくば、私が『はな』
なを見させられい、よそへござるまでもござらぬ。」

アト「いや、おのれは言語道斷のことをいひをる。おのれが面おもてなは
『鼻』といふ、『花』といふは別ぢや。」

シテ「さうではござらぬ。歌などにも櫻とは詠まれたれども、『はな』
とは詠まれませぬ。」

アト「なかく、でもないことをいひをる。その歌を詠うで聞かせ
い。」

シテ「詠うで聞かせたらば、肝を潰させられう。
アト「急いで詠め。」

シテ「心得ました。」

櫻＊散る木の下蔭は寒からで

空に知られぬ雪ぞ降りける』

これは何と。

アト「此方こちにも花といふ歌がある。」

シテ「さらば詠うで聞かせられい。」

アト「行き暮れて木の下蔭を宿とせば

花や今宵のあるじならまし』

シテ「この方にもまだござる。」

山櫻＊わが見に來れば春がすみ

峰にも尾にも立ちかくしつ、』

アト「それなら此方にもある。」

花＊の色は移りにけりないたづらに

我が身世に經るながめせしまに』

櫻散る
古今集、紀貫
之。拾遺集

行き暮れて
平家物語、平
忠茂。

山櫻
古今集、讀人
知らず。

花の色は
古今集、小野
小町。

シテ「それならば、この方には謠がござる。」

アト「謠へ、聽かう。」

ウシテ「櫻かざしの袖ふれて。」

アト「一段の謠謠ふ、致しやうがござる。やい、太郎冠者。ウタヒ「花見

車暮るゝより、月の花よ待たうよ、月の花よ待たうよ。」

シテ「はあ、これでつまりました。」

アト「總別何も知りをらいで、むざとしたことをいひをつて、某と競

合ひをる。彼方へ失せい。」

シテ「はあ。」

アト「えい。」

シテ「はあ。(續狂言記)

三 忠度都落

薩摩守忠度は入道の舍弟なり。淀の川尻まで下りたりけるが、郎
等六騎相具して、忍びて都へ歸り上る。如法夜半のことなるに、五
條三位俊成卿の宿所に行きて門を敲く。内にはこれを聞きけれ
ども、乱れの世なる上、いぶせき夜半のことなれば、敲けどもく、明
けざりけり。あまりに強く敲きければ、やゝ久しくありて、青侍を
いだし、戸を開かでこれを問ふ。「忠度と申すもの、見參に申し入れ
たきことありて参りたり。」と答へければ、三位大庭に下り、世に恐れ
て内へは入れざりけれども、門をば細めに開きて對面あり。
忠度宣ひけるは、「かゝる身として御爲憚りあれども、所詮一門榮花
盡きて、都に安堵せず、西海へ落ちくだり侍り。亡びんこと疑なし。
世鎮まりて後、定めて勅撰の沙汰候はんか。たとひ身は八重の潮
路の底に沈むとも、藻塩草かきおく末の言の葉、後の世までも朽ち
ぬ形見に傳はり侍れかしと思ひ出して、川尻より忍び上つて侍り。」

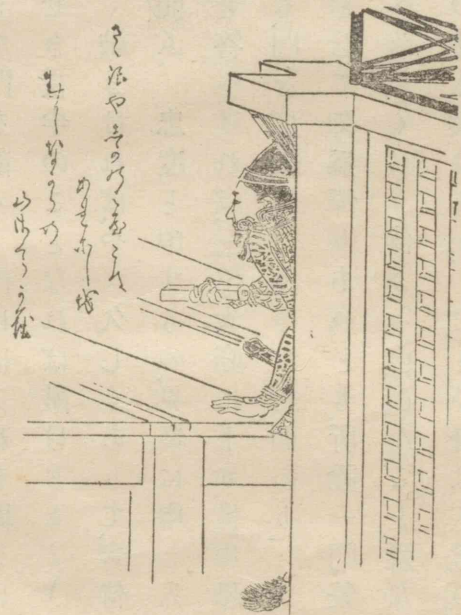
櫻かざしの
今はさながら
花も雪も皆
白雲の上人の
櫻かざしの袖
ふれて、花見
車暮るゝより
月の花よ待た
うよ。(謠曲、
小塩)

忠度 平忠盛の子、
平盛、入道、
壽永二年(六
十一)歿、年四
入道
平清盛、入道
となつて淨海
といふ。
俊成
皇太后宮大夫
藤原俊成、歌
人、五條京極
に、建仁四年
た、建仁四年
(六)歿、年
九十一。

これぞ年頃詠み集めたりし愚詠どもにて侍る。身とともに波の下に水屑となさんこと遺恨に侍り。これを砌下に進らせおき候勅撰の時は必ず思召し出せよとて、卷物一卷泣く泣く鑑の引合せより取出したり。

三位感涙を流してこれを受取り、御詠一卷預りおき候ひをはんぬ。これ永代秀逸の御形見、未來歌仙の指南たらんか。

この忽劇の中に御音信に預ること、恐悦少からず候かな。たとひ浮生を萬里の波に隔つとも、御形見をば一戸の窓に納めて、勅撰の



(筆齋容池菊) 度 忠 平

時は思ひ出し侍るべしと宣へば、忠度、今は身を波の底に沈め、骨を山野に曝すども、思ふことなしとて、馬に乗り、古詩を、

前途程遠 馳思於雁山之暮雲
後會期無 露纓於鴻臚之曉淚

と、うちあげ、詠じつ、南を指してぞ落ち行きける。本文には「後會期遙」と書きたるを、忠度還り見るべき旅ならず、今を限りの別れなりと思ひければ、後會期無と詠じけるこそあはれなれ。三位もなごりの惜しくして、遙かにこれを見送りても、あはれ、世に在りしには、この人どもにこそ詔ひ追従せしに、變る習とて、今は門を隔つることの悲しさよと、あはれなるにも涙、優なるにも涙、忍びの袖をぞ絞られける。

世鎮まりて後千載集を撰まれけるに、忠度のこの道を嗜み、川尻より上りたりし志を思ひ出し給ひて、故郷の花といふ題に、よみ人知

古詩 大江朝綱の作、和漢朗詠集にある。

千載集 後鳥羽天皇の文治三年、皇の白河院の院宣によつて撰した。

らずとて、一首入れられたり。

さ、なみや志賀の都は荒れにしを

昔ながらの山ざくらかな

とよめる歌なり。名字をも顯し、あまたも入れまほしかりけれど、朝敵となれる人のわざなれば、憚り給ひて、たゞ一首ぞ入れられる。亡魂いかにうれしく思ひけん。あはれにやさしくぞ聞えし。(源平盛衰記)

四 詩 興

夏 目 漱 石

山路を登りながらかう考へた。智に働けば角が立つ、情に棹させば流される、意地を通せば窮屈だ。とかくに人の世は住みにくい。住みにくさが高じると、易いところへ引越したくなる。どこへ引越しても住みにくいと悟つた時、

志賀の都
天智天皇の都
し給うた處。
ながら
長良山は近江
國にある

夏目漱石
名は金之助、
東京市の人、
文學者、大正
十五年歿、年五
十

詩が生れ畫が出来る。

引越すことのならぬ世が住みにくければ、住みにくいところをどれほどか寛げて、束の間の命を束の間でも住みよくせねばならぬ。



夏 目 漱 石

こゝに詩人といふ天職が出来、こゝに畫家といふ使命が降る。あらゆる藝術の士は、人の世を長閑かにし、人の心を豊かにするがゆゑに尊い。

住みにくい世から、住みにくい煩を引抜いて、有難い世界を眼のあたりに寫すのが詩である。畫である、あるは音楽、彫刻である。細かにいへば、寫さないでも、たゞ眼のあたりに見れば、そ

こに詩も生れ歌も涌く。着想を紙に落さないでも、鏗鏘の音は胸裏に起り、丹青を畫架に向つて塗抹しないでも、五彩の絢爛は自ら心眼に映る。たゞ己が住む世をかく觀じ得て、靈臺方寸のカメラに澆季、溷濁の俗界を清く麗かに収め得れば足りる。このゆるに、無聲の詩人には一句なく、無色の畫家には尺縑なくとも、かく人生を觀じ得るの點に於て、かく煩惱を解脱し得るの點に於て、かく清淨界に出入し得るの點に於て、またこの不同不二の乾坤を建立し得るの點に於て、我利私慾の羈絆を掃蕩し得るの點に於て、あらゆる俗界の寵兒よりも幸福である。

忽ち足下で雲雀の聲がしだした。谷を見下したが、どこで鳴いてゐるのか、影も形も見えない。たゞ聲だけが明かに聞える。せつせとせはしく絶間なく鳴いてゐる。方幾里の空氣が一面に蚤に刺されて、ゐたゝまらないやうな氣がする。あの鳥の鳴く音は瞬

時の餘裕もない。長閑かな春の日を鳴き盡し鳴き明しまた鳴き暮さねば、氣が濟まないと見える。その上、どこまでも登つて行く、いつまでも登つて行く。雲雀はきつと雲の上で死ぬに相違ない。登りつめた揚句は、流れて雲に入つて漂うてゐる中に、形は消えて無くなつて、たゞ聲だけが空の裡に残るのかも知れない。春は眠くなる。猫は鼠を捕ることを忘れ、人間は借金のあることを忘れる。時には自分の魂の居所さへ忘れて正體なくなる。たゞ菜の花を遠く望んだ時に眼が覺める、雲雀の聲を聞いた時に魂の在^{あり}所が判然する。雲雀の鳴くのは口で鳴くのではない、魂全體で鳴くのだ。魂の活動が聲に現れたものの中で、あれほど元氣のあるものはない。あゝ愉快だ。かう思つてかう愉快になるのが詩である。

忽ち^{*}シェレ^{Shelley}の雲雀の詩を思ひ出して、口の内で覺えてゐるところ

シェレ
英國の詩人。
(1792—1822)

ろだけ誦誦して見たが、覚えてゐるところは二三句しかなかつた。その二三句の中にこんながある。

前^{*}を見ては、後^りを見ては、物欲しと憧るゝかな我

腹からの笑といへども、苦みのそこにあるべし

美しき極みの歌に、悲しさの極みの想籠るとぞ知る

なるほど、いくら詩人が幸福でも、あの雲雀のやうに思ひ切つて、一心不乱に我が喜を歌ふわけにはいくまい。

少時は路が平かで、右は雜木山、左は菜の花が遠く續いてゐる。足の下に時々蒲公英を踏みつける、鋸のやうな葉が遠慮なく四方へにして、真中に黄色な珠を擁護してゐる。菜の花に氣を取られて踏みつけた後で、氣の毒なことをしたと振向いて見ると、黄色な珠は依然として鋸の中に鎮座してゐる、暢氣なものだ。また考を續ける。

* We look before and after
And pine for what is not:
Our sincerest laughter
With some pain fraught;
Our sweetest songs are those that
Tell of saddest thought.

西洋の詩は無論のこと、支那の詩にも、よく萬斛の愁などといふ詞がある。詩人に憂はつきものかも知れないが、あの雲雀を聞く心持になれば、微塵の苦もない。菜の花を見ても、たゞ嬉しくて胸が躍るばかりだ。蒲公英もその通り、櫻も——櫻はいつか見えなくなつた。かう山の中へ来て自然の景物に接すれば、見るものも聞くものも面白い。面白いだけで、別段の苦みも起らない。苦みがあるとするれば、足が草臥れて、うまいものが食べられないことぐらゐだ。苦みのないのは何故だらう。たゞこの景物を一幅の畫として觀、一卷の詩として讀むからである。畫であり詩である以上は、地面を貫つて開拓する氣にもならねば、鐵道を敷いて一儲けする料簡も起らない。たゞこの景色——腹の足しにもならない、月給の補ひにもならないこの景色が、景色としてだけ余の心を樂しませるから、苦勞も心配も伴はないのだらう。自然の力はこゝに於て

か尊い。吾人の性情を瞬刻に陶冶して、醇乎として醇なる詩境に入らせるのは自然である。

五 洋樂の鑑賞

弘田 龍太郎

畫でも、色や線を見れば見るほど、また書けば書くほど、鑑賞力が發達するやうに、音樂の鑑賞も、これに馴れることが第一の要件です。それは樂器の音を聴くだけでもよいので、そして、ごく通俗的なものから始めて差支ありません。例へば、ホーム、スウィート、ホームとか、ローレライとか、とにかく自分の最も容易に解し得るもの、最もよく共鳴し得るものから入るのです。また通俗的で簡単な民謠風のものには、時代を超越した傑作が少くありませんから、此等もまた面白からうと思ひます。かうしてゐる中に、きつと他の曲を求めらるやうになつて來ます。それには、シューベルトやシューマン

弘田龍太郎、高知縣の人、明治二十五年生、音樂家。

シューベルト、オーストリアの作曲家。(1797—1828)シューマン、

マンの作品中の解し易いものが適當です。それから次第に諸大家の聲樂曲なり器樂曲なりへ進んでいけるやうになります。つまり、最初は、簡單でしかも心から好きで堪らないやうな曲を味ふのです。

ドイツの作曲家。(1810—1896)

一般に、順序としては、まづ古典的作品からよく鑑賞していくがよいです。それは古典的作品の價值を知るばかりでなく、それによつて、近代的作品を聴く時に、その眞價を認めることが出来るやうになるからです。しかるに、何事も近代的でなくてはならないといつて、殆ど音樂鑑賞の準備も出來てゐないのに、いきなり近代樂を聴いたところで、半分も理解が出來ず、結局見當ちがひの考を抱くやうになるのに過ぎません。

音樂を聴くには、可なりその準備が出來てゐなければ、立派な作品に對しても、殆ど得るところはありません。最も偉大な作品だか

らといつて、^{Beethoven}ベートーヴェンの第九シンフォニーの全曲などをいかに完全に聴かせてもらつても、準備のない人にとつては、たゞ噪然たる音響が耳に入るばかりで、何等の感興も起りません。そして結局洋樂は難解なものであると思つてしまふやうになります。繪畫や彫刻などならば、一つのものをいつまでも観てゐることが出來、また幾度でも繰返して見直すことが出來ますけれども、音樂では、音は瞬間に消失して、聴者の理解力とともに進行しませんが、よほど鑑賞力が鋭敏になつてゐなければなりません。準備の最もよい手段は、自分の最も好む歌を、時につけ折にふれて口ずさむことです。花咲く小川のほとり、たゞ一人で口ずさむ、たとひ、その歌ひ方がどんなに下手でも、その聲がどんなに小さくても、—もうそれだけで美しいことです。また樂器—ピアノでも、ヴァイオリンでも、オルガンでも、マンドリンでも、—を手に入れて、^{Violin} ^{Organ} ^{Harmonium}

ベートーヴェン
ドイツの作曲家。(1770—1827)

相當な先生の指導によつて練習すれば、その鑑賞力はめき／＼と向上します。また音樂上の話を聴くことも、時には意外に鑑賞力を進ませることがあります。そして一度でも多く演奏に聴き馴れることの大切なのはいふまでもありません。更に、鑑賞力を高めようとすれば、音樂を歴史的に考察することが必要です。即ち十八世紀、十九世紀及び現代の音樂はどうか、^{Chopin}ショパンはどうか、近代のフランス音樂はどうか、未來派の音樂はどうかなどと調べて見るがよいです。それから樂曲を理論的に解剖して見ることも必要です。即ち樂典、和聲學、對位法、樂式論、管絃樂編制法の研究などです。かうなると、もはや専門の領分にはひつていくので、他の理學的、音響學的乃至美學的研究などとともに、その道に深く立ち入るやうになります。

ショパン
ポーランドの
音樂家。(1810—1849)

六 文化生活の出発點

三宅雪嶺

文化生活の出発點は、眞善美を指して進まうと心掛けるところにある。眞と善と美と三つ組を形作り、各獨立しながら相接觸して、よくこれを調諧均齊し、少しも矛盾せぬやうにするのが完全な生活である。

眞善美は果して完全の要諦であるか、いかにしてこれを證明するかといふに、これは人類が幾代となく經驗を積み知識を練つておのづと知り得たのであつて、今は誰でも熟知してゐる。眞善美といふ名称はギリシヤ人が始めて唱へたといふが、ギリシヤばかりが發明の榮譽を荷ふわけにはいかぬ。同様のことは何處にもあるもので、これを言葉に現さぬにしても、事實には現してゐる。日本の三種の神器は、特にこれに眞善美を配當したのではないが、おのづから相當するところがある。即ち鏡は眞、劍は善、玉は美を現す。

三宅雪嶺
名は維二郎、
金澤市の人、
萬延元年生、
文學博士、評
論家。

鏡が物その物を有りのまゝに映じ眼を眼とし、耳を耳として、少しの間違をも許さぬのは眞を意味する。劍が、或は殺人劍といひ、或は活人劍といつて悪人を除き善人を救ふのは善を意味する。玉



三宅雪嶺(柳敬助筆)

が何等の必要もないやうで、しかも見て飽くことのないのは美を意味する。「何故にこの三つを並べるか、それは偶然に並んだのではないか」と論ずる人もあらうが、かく解すべき事實のあることは

否定されぬ。支那で智仁勇を達磨とし、日本で、智を鏡に當て、仁を玉に當て、勇を劍に當てたことがある。普通に世間で眞善美と分けて、またこれを意識せぬやうでも、一たび聞けば、何人もこれを了

解するのは、人の頭腦がかう出來上つてゐるからである。眞善美の語の起源は數千年前にある。そこで随分舊いものとして、今日これを差措いて顧みぬものが少くない。數千年間の歴史を見るに、概ねその一部だけを認めて、この三つを合せて認めようとせず、或は殊更に他の部分を排斥して已まぬ。今日文化の進歩が著しいとしても、眞と善と美とが離れがちになり、黨派的軋轢ともいふべき形がある。科學者は實驗に照して眞實を知らうとし、他に何事があつても振返つて見ず、偶振返れば輕蔑の目を以て見る。宗教家や道德家は、昔から善惡正邪と定つたところから見て、過去の形式に當て嵌らねば、人間扱にすべきでないやうに心得てゐる。藝術に従事するものは、眞といひ、善といひ、勝手に取極めたことであつて、埒もないことで身を窮屈にするよりも、美に憧れ美的生活を送る方が生甲斐があると称する。これは時代により土

地によつて相違があるけれど、古來幾度繰返されてゐるか知れぬ。繰返される中に多少進歩はするものの、一部を固執して他を慮らねば、己自らを不具にする嫌がある。遺傳または偶發で不具になることもあるが、多數は身體的にも精神的にも立派に發育する可能性を備へてゐる。それが周圍の事情で不具になり、恰も盲と啞と聾とが互に相罵るやうな滑稽を演ずるのは、深く戒むべきことではないか。社會が進むとともに分業もまた進み、なんでも専門に分れる以上、互に相分れるのが進歩だと考へるのは、耳を破つて目の見えるやうにし、目を潰して耳の聞えるやうにしようとするのに似てゐる。聾で繪畫に長ずるのがあり、盲で音樂に長ずるのがあるけれども、それで畫家が聾にならねばならぬといふことがなく、音樂家が盲にならねばならぬわけもない。Helen Keller *ヘレン・ケラーが盲啞で人並以上の能力があるからとて、人々が盲啞にならうとす

ヘレン、ケラー
米國の女流思想家、現存。
(1880)

れば、全く瘋癲の伍伴に入る。眞善美が別々にあるべきものではないことは、五官の別々にあるべきでないと同様である。たゞし、人によつて、三つが同じやうには備はらず、厚薄の別のあることは免



(左) - ラケ、ソレへの中話會と女少

れぬ。眞善美を揃へて進むのは、文化生活に大切なことで、食物でも、衣服でも、家屋でも、公共生活でも、なるべく三拍子を揃はせたい。さて、食物に何の眞善美があるかといふに、生理的衛生的に法則を守るのは眞を求めるのである。しかし、單にそれだけでは濟まぬ。肉類をとるにも同類のは避け、また動物でも慘酷な

方法を用ひて捕へまいとする、これは善を求めるのである。また食物は料理して美味を増すばかりでなく、體裁もあまり見苦しくはならぬ。刺身はどう切つても、味と消化に變りはないが、體裁よく切るに越したことはないとする、これは美を求めるのである。そして眞は善美を助け、善は眞美を助け、美は眞善を助け、互に相助長するところがある。衣服や家屋についても同様である。堅實も質素も結構である。しかし、一概に華美を排斥すべきでない、ただ堅實質素と撞着せぬ範圍に於てすべきである。眞善美の一つだけ離して、他の二つを顧みぬのは、或點に得るところがあつても、要するに不具であることを免れぬ。この三つは調和を要する。その調和もさまざまむづかしいことではない。かの英國のゼントルマンの生活は、正しく眞善美を心掛けるものといへる。彼等が世界紳士の模範と称されるのも偶然でない。

荻野獨園が弟子に謂つた、釋迦は今正に兜率天で頻りに勉強してゐられる。我等はなんとして勉強せずにもゐられうぞ。普通ならば、釋迦は理想に達し進歩を極めたとするところを、獨園はそれと違ひ釋迦も現に勉強してゐるとした。そこに一隻眼があると認められる。長い間には進歩があり停滯があり退歩もあるが、大體に於て、人生は進歩を續け、いつまでも進歩の途にある。しかし、今は今で完全に近づくことが出来ぬでなく、眞善美を指して進む間瞬間でも完全に近づきつゝあると称し得る。正しく清く麗しく慈みのある生活を送らうと思ひ立つのが、文化生活に入るの第一歩である。そしていやが上にも充實し發展し、完全に達し圓滿に到らうと、絶えず進むところに人生の實相が現れる。眞善美を指して進めば、いつ死んでも、それだけ適當に生活し得たのである。

荻野獨園
明治の禪僧。

古今千遍讀

雨森芳洲

寒歲畫狀お達し由返書來し仕らぬ傲内新歳の芳翰
又々お達し馬くお見は外弥々壯固く由重なるさ
是傲由所慰この由事と存じ幸里外許お変らば私儀
無為に罷在り由度共し由佳作中見せ下され備へ上
京以後別して由精出すは傲ゆきし由座ゆや格あし
由上達るされゆ様存じ幸里珍重に過き由傲
詩し傲多看多商量多し中傲兎角多く由作里なきれ
上手不由成りなきるべく傲商量の字先づ由人と相
談することを申外へども由人燈お談致れおかりにてハ
世之心を以て心し問ひ我お心よて思案する事をま
商量の中傲傲話にも人此申此を承り思案致し

雨森芳洲
名は誠清、京
都の人、對馬
藩の儒臣、寶
永五年歿、三
十六年式、三

此返事や成べく候と申候時ハ待承商量回話と申候
 和歌致し進し申小様御世下され小此許由逗留申
 右一時の由挨拶と存じ悪詩も作り申小へども上方
 までを恥しく由座にて上せ難く由座小をき板和歌
 をば仕り申さ成候由宥怒下さるべく候由、に一つ
 可笑き話由座小取書きつ希由目かけ候由笑ひ
 下さるべく候
 去年より繁右衛門杯踏と宴合ひ歌の會致致し間々
 私其の座へ来里小事も小へむ私小も是暇歌をよみ小
 へと申小へども詠を平仄なりと習ひ覚え居り小へと
 歌と遂し百人一首の講釋をも季里しる事小も由座な
 くなけりらむ一つも埒を明き申さ成候其の上歌

繁右衛門
 姓は古川、名
 は方久、對馬
 の國老。

詞とて去當々存し申さ成小し付古今手通讀と申候
 原を心し立て申候て最早百五十遍を昨日まで讀
 みおほせ申候今までの積りに致小へ成八十廿七
 月十千遍の數満ち申候積里し由座小其の旨に老毫
 致小へ又を閻羅堂より句死鬼など遣はし申され候
 ち仕るべき様も世々小へども先つを歌を満し小
 心小由座積右千遍讀み候てさて歌を詠みあ、り候
 心に由座小是を壽翁の多ハ脇小除希置きての分別
 小由座候へ成さるる可笑しき事小由座小侮し私
 最早世間し望ある者にも無し小へ成斯く致して死
 を待ら小も一壽事と存し立ち候事小由座小此の如
 書きつ希由目かけ候由老人だ、斯く存候事小に

古座の座皆様も古事少に古座をされ候へお當と
徒に古着いなきさきさきやう申上りたく此の如
くに古座の同志此御面へ古座の首は此御侍
へなされ下さるべく頼み事申上りたき事古座を
へども古座堪へ難く早と共古座及び御侍後者を
期し候恐と謹言

八 古今集歌選

袖ひびてむすびし水の氷れるを

紀貫之

春立つけふの風やとくらん

凡河内躬恒

紀貫之
歌人、古今和歌集撰者、天
慶九年(一六〇)
没

凡河内躬恒

月夜にはそれとも見えず梅の花

香をたづねてぞ知るべかりける

在原業平

世の中に絶えて櫻のなかりせば

春の心はのどけからまし

紀友則

久かたの光のどけき春の日に

しづ心なく花の散るらん

伊勢

さつき來ば啼きもふりなん杜鵑

まだしきほどの聲を聞かばや

僧正遍昭

はちす葉のにごりにしまぬ心もて

歌人、古今和歌集撰者

在原業平
歌人、阿保親

王の第五子、元
慶四年(一五三)
没、年五十八

紀友則
歌人、古今和歌集撰者

伊勢
歌人、宇多天皇の頃の人

僧正遍昭
歌僧、俗名長峰宗貞、寛平二年(一五〇)没、年七十五

なにかは露を玉とあざむく

藤原敏行

秋來ぬと目にはさやかに見えねども

風のおとにぞおどろかれぬる

讀人しらず

昨日こそ早苗とりしかいつの間

稲葉そよぎて秋風の吹く

壬生忠岑

山里は秋こそことに侘しけれ

鹿の鳴く音に目をさましつゝ

清原深養父

冬ながら空より花の散り來るは

雲のあなたは春にやあるらん

清原深養父
歌人、醍醐天皇の頃の人。

朝ぼらけ有明の月と見るまでに

坂上是則

よしのの里に降れる白雪

素性法師

古にありきあらずは知らねども

ちとせのためし君に始めん

在原行平

立ち別れいなばの山の峰に生ふる

まつとし聞かば今歸り來ん

藤原兼輔

君が行く越の白山しらねども

雪のまに／＼あとは尋ねん

安倍仲麿

坂上是則
歌人、醍醐天皇の頃の人。

素性法師
歌僧、俗名長峰玄利、清和天皇の頃の人。

在原行平
阿保親王の第二子、業平の兄、歌人、寛平五年(一五三)歿、年七十六。

藤原兼輔
歌人、承平三年(一五三)歿、年五十七。
安倍仲麿
遣唐留學生、唐朝に仕へて、實名した、實名元年(一五三)歿、年七十。

天の原ふりさけ見れば春日なる

三笠の山に出でし月かも

小野篁

わたの原八十島かけて漕ぎ出でぬと

人には告げよあまの釣舟

九 歌の新派舊派

與謝野晶子

新派舊派といふ名目は明治二十六年頃から起つたのですけれども、實際この兩派はいづれの時代の文學にも發見される現象です。或新しい文學の作者が出て、或新しい詩風とか文體とかを作り初める、それが新派です。この意味に於て、額田女王、柿本人麿、山部赤人、笠金村、高橋蟲鷹、石川郎女、山上憶良、大伴旅人、大伴家持などの萬葉集の中の優れた作者は、奈良朝以前及び奈良朝時代の新派

小野篁
嵯峨天皇の頃の漢學者、仁壽二年(五三三)歿、年五十一。

與謝野晶子
與謝野鐵幹の妻、もと鳳氏の堺市の人、明治十一年生、歌人。



藤原人麿

小野小町、僧正遍昭、在原業平などの謂はゆる六歌仙に數へられる作者は、平安朝初期の新派、凡河内躬恒、紀貫之、壬生忠岑、伊勢などの、

古今集の中の卓越した作者は、平安朝盛期の新派、齋宮女御、大中臣能宣、曾根好忠、馬内侍、和泉式部などは、平安朝中期の新派、藤原基俊、源俊賴、藤原俊成、顯昭法師などは、平安朝晩期の新派、藤原定家、藤原良經、源雅經、式子内親王、宮内卿、俊成卿女、寂蓮法師、西行法師、藤原家隆などの、新古今集の中の秀でた作者は、平安朝末期から鎌倉時代の初期へかけての新派です。

それから近世になつて、短歌ではありませんが、元祿に於ける松尾

芭蕉一派の俳句、天明に於ける與謝蕪村一派の俳句は、詩壇の新派です。また徳川晩期の大隈言道、香川景樹、橘曙覧などの短歌も、一種の新派といつて差支ありません。

新派にも種々あつて、最も徹底したのは、着想も技巧もともに面目を新しくして出て來ます。前に擧げた萬葉集の中の人麿、赤人以下の諸歌人の作はそれです。遍昭など六歌仙の短歌、芭蕉蕪村などの俳句もそれです。また着想だけが新しく、技巧は前代の手法を用ひたもの、或は技巧だけが新しく、着想は舊派を脱しないものなどもあります。和泉式部、西行などの歌は前者、貫之乃至近世の小澤蘆庵、景樹などの歌は後者です。

俊秀な作者の手に成つた新派が勢力を得ると、その次には、凡庸な作者、詩人としての天分に乏しい作者、若しくは全く詩人の天分がないのにも係らず、詩人と僭称する俗人が出て來て、前代の新派の

作風を典型とし、専らそれに摸して作らうとし、その以外に自己獨創の新詩風を出さうとせず、たゞ前人の着想と技巧とを繰返すに過ぎません。さういふ没自己の詩風を、更に起る新派と比較して舊派と呼ぶのです。

現在舊派として最も目立つものは、眞淵派、景樹派、宮内省派の短歌でせう。有力な新派が、詩歌ばかりでなく、小説にも劇にも繪畫にも發生してゐる現代に於て、眞淵や景樹以上に出ることの出來ない舊派の短歌ほど時代後れのものはないと思ひます。

一〇 大原御幸

後白河法皇は文治二年の春の頃、建禮門院の大原の閑居の御住居御覽ぜまほしう思召されけれども、如月彌生のほどは嵐烈しう、餘寒も未だ盡さず、峰の白雪消えやらで、谷のつらゝも打解けず。か

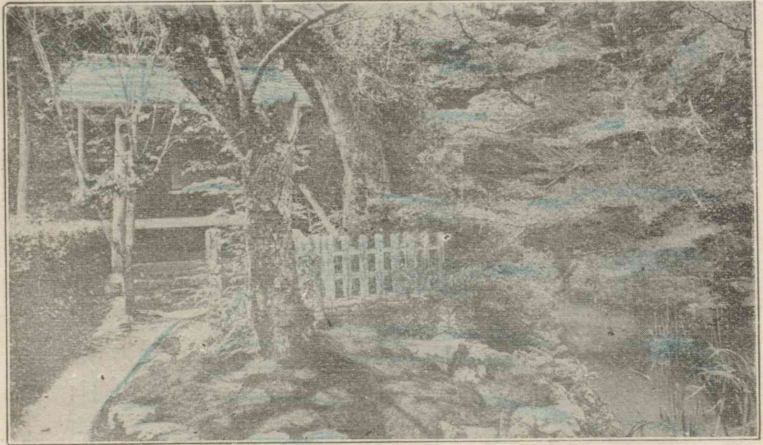
眞淵 賀茂氏。

後白河法皇 第七十七代、建仁三年(元三)崩御、御年六十六。
文治二年 後鳥羽天皇の御代(元三)。
建禮門院 御名は徳子、平清盛の女、高倉天皇の中宮、安徳天皇の御生母、建保元年(公三)崩御、御年五十七。
大原 山城國、京都の北。

くて春過ぎ夏立ちて、北祭も過ぎしかば、法皇夜をこめて、大原の奥へ御幸なる。忍びの御幸なりけれども、供奉の人々には後徳大寺*花山院*土御門以下、公卿六人、殿上人八人、北面少々候ひけり。遠山にかゝる白雲は、散りにし花の形見なり、青葉に見ゆる梢には、春の名残ぞ惜しまるゝ。頃は卯月二十日あまりのことなれば、夏草の茂みが末を分け入らせ給ふに、始めたる御幸なれば、御覧じなれたる方もなく、人跡絶えたるほどと思召し知られて哀なり。西の山の麓に一宇の御堂あり、即ち寂光院じやくくわういんこれなり。舊う造りなせる泉水、木立よしあるさまの處なり。蕩破れては霧不斷の香を焼き、扉落ちては月常住の燈を挑ぐ。とは、かやうの處をや申すべき。庭の若草茂りあひ、青柳糸を乱りつゝ、池の浮草波に漂ひ、錦を晒すかとあやまたる。中島の松に懸れる藤波の、うら紫に咲ける色、青葉交りの遅櫻、初花よりも珍しく、岸の山吹咲き乱れ、八重立つ雲の

後徳大寺
左大臣實定。
花山院
大納言兼雅。
土御門
權中納言源通親。

絶間より、山郭公の一聲も、君のみゆきを待ちがほなり。法皇これを觀覽あつて、かうぞ遊ばされける。池水にみぎはの櫻ちりじきて、波の花こそ盛りなりけれ。舊りにける巖の絶間より落ち來る水の音さへ、ゆるよしあるところなり。緑羅の垣、翠黛の山、繪にかくとも筆も及びがたし。さて、女院の御庵室を觀覽あるに、軒には蔦朝顔あざみ這ひかゝり、しのぶ交りの忘草わすれ草、瓢箪ひょうたん屢しばしば空し、草顔淵くさげんえんが巷に滋く、藜藿れいこく深く鎖せり、雨、原憲げんけんが樞すゐを濕



寂光院の汀の櫻

瓢箪云々
和漢朗詠集の
句。顔淵、原憲
ともに孔子の
門人。

す。ともいひつべし。杉の葺きめもまばらにて、時雨も霜もおく露も、洩る月影に争ひて、たまるべしとも見えざりけり。後は山前は野邊いさゝ小笹に風騒ぎ、世に立たぬ身の習とて、憂き節しげき竹柱、都の方の音づれば、間遠に結へるませ垣や、僅かに言とふものとは、峰に木傳ふ猿の聲、賤が爪木の斧の音、これらが音づれならでは、まさきのかづら、青つゞら、くる人稀なる處なり。

法皇、人やある、人やある。と召されけれども、御いらへ申すものもなし。やゝありて、老い衰へたる尼一人参りたり。女院はいづくへ御幸なりぬるぞ。と仰せければ、この上の山へ花摘みに入らせ給ひて候。と申す。さこそ世を厭ふ御習といひながら、さやうのことに仕へ奉るべき人もなきにや、御痛はしうこそ。と仰せければ、この尼申しけるは、五戒十善の御果報盡きさせ給ふによりて、今かゝる御目を御覧せられ候にこそ。捨身の行になじかは御身を惜しませ

給ひ候べき。とぞ申しける。この尼の有様を御覧ずれば、身には絹布のわきも見えぬものを結び集めてぞ着たりける。あの有様にてもかやうのことを申す不思議さよと思召して、抑、汝はいかなるものぞ。と仰せければ、この尼さめふと泣いて、暫しは御返事にも及ばず。やゝありて、涙をおさへて、申すにつけて、憚り覚え候へども、故少納言入道信西（せんせい）が女阿波内侍（あはのちうし）と申すものにて候なり。母は紀伊二位。さしも御いとほしみ深うこそ候ひしに、御覧じ忘れさせ給ふにつけても、身の衰へぬるほど思ひ知られて、今更せん方なうこそ候へ。とて、袖を顔に押しあてて、忍びあへぬさま、目も當てられず。法皇、げにこそ汝は阿波内侍にてあなれ。御覧じ忘れさせ給ふぞかし。何事につけてもたゞ夢とのみこそ思召せ。とて、御涙せきあへさせ給はねば、供奉の公卿殿上人も、不思議のこと申す尼かなと思ひたれば、ことわりにて申しけり。とぞ、おのゝ感じあ

信西
藤原通憲、平
治元年（二八九）
歿。
紀伊二位
信西の妻朝
子。

はれける。

さて、女院の御庵室へ入らせおはしまし、障子を引きあけて叡覽あるに、一間には來迎の三尊おはします。中尊の御手には五色の糸

を懸けられたり。左に普賢の畫像、

右に善導和尚並に先帝の御影を懸

けられたり。蘭麝の匂に引きかへ

て、香の煙ぞ立ちのぼる。さて、傍を

叡覽あるに、御寢所とおぼしくて、竹

の御竿に、麻の御衣、紙の衾など懸

けられたり。さしも本朝漢土のた

へなる類、數をつくしし綾羅錦繡の

粧、さながら夢にぞなりにける。法皇御涙を流させ給へば、供奉の

公卿殿上人も、まのあたり見奉りしことども今のやうに覺えて、皆



建禮門院木像

善導和尚
唐の名僧
先帝
安徳天皇

袖をぞ絞られける。

や、ありて、上の山より濃き墨染の衣着たりける。尼二人、岩のかけ

ぢを傳ひつゝ、下り煩ひたるさまなりけり。法皇、あれはいかなる

ものぞと仰せければ、老尼涙をおさへて、花筐臂にかけ、岩躑躅取具

して持たせ給ひて候は、女院に渡らせ給ひ候。爪木に蕨折添へて

持ちたるは、鳥飼中納言維實が女、五條大納言行綱の養子、先帝の乳

母、大納言典侍局すけのつぼねと申しもあへず泣きにけり。法皇御涙を流させ

給へば、供奉の公卿殿上人も皆袖をぞ濡されける。

女院は、世をいとふ御習といひながら、今かゝる有様を見えまゐら

せんずらん恥しさよ。消えも失せばや、と思召せどもかひぞなき。

宵々ごとの閑伽の水、掬ぶ袂も萎るゝに、曉起きの袖の上、山路の露

も繁くして、絞りやかねさせ給ひけん、山へも返らせ給はず、また御

庵室へも入らせおはしまさず、あきれて立たせまし、くたるとこ

大納言典侍
局
平重衡の妻。

ろに、内侍の尼参りつゝ、花筐をば賜はりけり。「世を厭ふ御習、何か
苦しう候べき。早々御見参ありて、還御なし参らせ給ひ候へ。」と申
されければ、女院御涙を抑へて、御庵室に入らせおはします。「一念
の窓の前には攝取の光明を期し、十念の柴の樞には聖衆の來迎を
こそ待ちつるに、思の外の御幸かな。」とて、御見参ありけり。(平家物語)

一一 新 緑

池 邊 義 象

白檜の若葉の露を帯びたるに、月のさしたるはいふべくもあらず。
檜柏などの茂り合ひたるが、風に吹かれてその葉の靡き合ひたる
は、葛の葉の秋さへ思ひやられてをかし。楓の青々とはいえたる、ま
して庭などに植ゑたるが赤き芽を匂はせたるは、愛敬こぼるゝ少
女を見る心地ぞする。藤の葉の長う伸びて棚をおほへるは、花の
春のゆかりも思ひおこされ、櫻の若葉の柔かなるには、眠れる蝶の

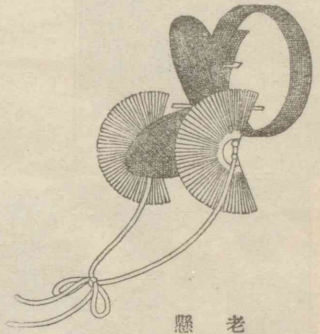
池邊義象
熊本縣の人、
國文學者、
内省御歌所寄



葵 祭 の 行 列

夢さへ推し測らる。
榎・楠・銀杏などの高く大きなが
茂り合ひたるは、殊に人の心を清
うするものなるが、賀茂の祭のこ
の下蔭に行はるゝは、神々しさも
花やかさも添ひて、初夏のけしき
はこゝに盡きぬべくぞ思はるゝ。
さるは、花傘・菅傘・鈴懸の馬・山城使
内藏使・舞人・倍べい従じゆなどの列を正し
て行くも古おぼゆるに、檢非違使
の殊に縫腋の袍を着、老懸を疊紙
につゝみて懐に入れ行くなど、こ
の御祭にのみ行はれし故實もそ

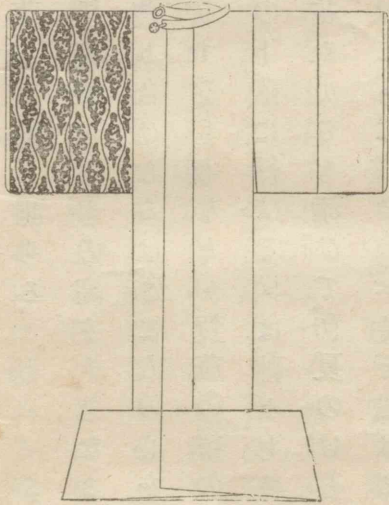
賀茂
賀茂別雷神社
賀茂御祖神社
賀茂の祭
昔は四月の中
の西の日に
今は五月十五
日にこれを
行ふ



懸老

のまゝなるぞうれしき。草木の緑つや
やかにして、御手洗の水も青むばかりな
るに、東遊の樂さやかに響きて、舞人の袖
のうつれる、いかで心もすまざらん。勅
使の貴げに宣命よむ聲に、廣前の御帳の
風に動ける、畏さも添ひぬかし。馬場に

ては、草の筵を踏み散す走馬の
めざましきがあり。樗の花の、
青きが中にひとり紫なるもゆ
かし。物賣る女どもいと多き
が中に、大原女の赤き襷かけた
るぞ目立つめる。堤の松も今
日は殊に色そひ、下蔭の卯の花



袖の腋縫

の川に臨めるが、布引きはへたるやうなるもすがし。
さても、かくみやびかなる眺は、西の京に勝れるところあらざめれ
ど、東海道第一の景色をなせる富士が根の初夏の眺は、また飽くこ
となき極みにぞありける。一日、岩淵驛なる古谿莊を訪ひまゐら
せしに、その庭より打仰ぎたる頂の雪の清くさやかなるは言ふも
さらにて、裾野のおしなべて青緑につぎきたるは、かばかりの景色
またいづこにかとぞおぼえし。愛鷹山あしたか鷲頭山しゆづつなども、この緑の中
の一塊となりて、はては大海の青きに聯りたるに、遙かなる眞帆片
帆の白きと高根の雪との外は、天地悉く青筵を敷きたるやうなり。
昔より、春は青色を帯びて立つ。と言ひ傳へたれども、まことは初夏
のもて來る色なりけり。
薄の葉、麥の穂、柵荆さくしげの枝さへ、この頃までは手を切るとしも見えず。
八手の葉やちてのなよやかなるを取り來りて、頬に押當つれば、ひや／＼

岩淵 静岡縣、富士川の西岸、富士古谿莊の別莊。中光顯
愛鷹山 富士山の東南麓、海拔三九一七尺。
鷲頭山 静岡縣沼津町の東南

と心地よく、かな要木の若葉摘みとりて口に銜めば、いとやはらかに、甘き汁さへ出でぬる、いとなつかし。桑の葉の蚕に食はるゝもこの頃にして、茶の芽の争ひ摘まるゝもきのふけふのことぞかし。
立つことやすき花のかげかは、と、古人の歎きけんもさることながら、この柔かなる青葉に月かげ日かげのさしくははれる、いかで花の春に劣るべき。まして杜鵑一聲雲を破れば、緑の色も一しほ加はり、こぼるゝ露も青む心地するをや。

ほとゝぎす青葉もりくる一聲に

花にねし夜の夢はさめてき

一一 妹にさとす その一

吉田 松 陰

この間は御文下され、観音様の御洗米三日の精進にて頂き候やうとの御事、御深切の御志感じ入り申候。精進、潔齋などは随分心の

吉田松陰
 名は矩方、通稱寅次郎、長門國萩藩士、幕末の志士、安政六年(五二)

立つこと
 けふのみと春をおもはぬ時だにも立つこと易き花の蔭かは、古今集凡河内躬恒

かたまり候ものにて、宜しきことと存候に付拙者も二月廿五日より三月晦日まで、少々志の候へば、酒肴ども一向食べ申さず候。その間一度オウレン靈神様御祭のもの頂戴致候ばかりに御座候。まして三日の精進はさまでむづかしきことにもこれなく、御深切のことに候へば、相果したく存候へども、當所にては、あたりまへの精進の外にまた精進と申候うては、連中または番人ども何故と怪しみ尋ね候に付、それをそれと相答へ候こと面倒に存候故、八日は幸ひ精進日なれば、その日一日に頂き申候。

抑、観音様信仰せよとのことは、定めし禍をよけ候ためなるべく、これは大いに論のあることに候へば、委細申進すべく候。
法華經の普門品と申すに、観音力と申すこと高大に述べてこれあり候。大意は、観音を念じ候へば、繩目に懸り候へば、忽ちぶつくと繩が切れ、人屋へ捕はれ候へば、忽ち錠鍵が外れ、首の座へ直り候

心歿、年三十九

妹
 松陰の長妹千代子は、安政六年四月十三日、この書陰が萩の野山千代子に與へたるものてある。
 靈神様
 松陰の實家の杉氏の先祖の靈を祀つたもの

法華經
 正しくは妙法蓮華經、一八卷二十八品、普門品、第二十五品。

へば忽ち刀がちんぢに折るゝなどと申してこれあり候。これは、拙者江戸の人屋にて、この經は幾度も繰返し讀みて見候へども、始終この趣に候。それ故凡人はこれより有難きことはなしとて信仰するも無理はなく候。

さりながら、佛の教は奇妙なる仕掛にて、大乘・小乗と二つに分ちて、小乗は下根の人への教、大乘は上根の人への教と定めこれあり候。小乗にて申候へば、觀音は右の經文の通りのものと心得、ひたもの信仰せしむることに御座候。これは大いに信を起さするためなり。信を起すとは、一心に有難いことぢやとのみ思ひ込み、餘念他慮なきことにて、一心不乱と申すもこのことなり。人は一心不乱になりだにせば、何事に臨み候うてもちつとも頓着なく、繩目も人屋も首の座も平氣になられ候故、世の中にいかに難題・苦患の來るとも、それに退轉して不忠・不孝・無禮・無道など仕る氣遣はなし。さ

ちんぢ
微塵といふ意
の長州の方
言。
江戸の人屋
傳馬町の獄。

吉田松陰肖像及び目識

三分出處台諸島已矣夫一身入浴可實地各在哉
心師貫高号而無未立名志仙守運可達之釋難才
讀書無功可操學三十年滅賊失計百猛氣止一回
人識狂禪兮鄉黨衆不容身許家國兮死生吾久爾
至誠不動兮自古未之有人宜立志兮聖賢教是階

乙未五月吾有聞左之也時暮純源從歸難解余
因以永訣告諸友謀使浦島宿習身像吾自贊之願
無窮知吾者宜特字吾貌而已哉況吾之自贊予諸
友其深藏之吾仰標而幅乃有生也
二十一回猛士藤堂撰并書



れど、初より凡夫に一心不乱の不退轉のと申聞かせても、少しも耳に入らぬもの故に、假に觀音様を拵へて、人の信を起させ候教に御座候。これを方便とも申候。さてまた、大乘と申す方にては、出世法と申すことが肝要に御座候。出世と申候うても、立身出世など申すことには御座なく候。その初は、釋迦が天竺王の若殿に候ひしところ、若き時より感の強き人にて、老人を見ては我が身も往く先は老人にならんかと悲しみ、死人を見ては我が身も往く先は死なんかと悲しみ、虫けらの死にたる、草木の枯れたるまでに悲みを發し、生老病死がこの世の習なれば、是非にこの世を出ねば濟まずと志を立てて、年二十五の時位を棄てて山に入り、右の生老病死を免るゝ修行をしに參られ候。さ候うて、三十出山とて、僅か五年の間に、生老病死を免るゝことを悟り、生れもせねば老いもせず、病みも死にもせぬことを悟つて出で

來て、それより世の人々を教化せられたり。これが即ち出世法なり。故に出世せねば濟世の出來ぬと申すもこのことなり。濟世といふは即ちこの世の人を濟度することに御座候。さて、その死なずと申すは、近く申さば、釋迦の孔子のと申す御方は、今日まで生きて居らるゝ故人が尊みもすれば有難がりもし恐れもするなり。果して死なぬに候はずや。死なぬ人なれば、繩目も人屋も首の座も、前申す觀音經の通りには候はずや。楠木正成とか大石良雄とか申す人は、刃物に身を失はれ候へども、今以て生きて居らるゝなり。即ち刀のちんぢに折れたる證據なり。

一三 妹にさとす その二

さてまた、禍福繩の如し。といふことを御悟りなるが宜しく候。禍が福の種、福が禍の種に候。人間万事塞翁が馬に御座候。拙者な

ど、人屋にて死ぬることに候へば禍のやうには候へども、また一方には學問も出來、己のため人のため、後の世へも残り、かつゝ死なぬ人々の仲間入も出來候へば、福この上もなきことに候。人屋を出で候はば、またいかなる禍の來んも知れ申さず候。勿論その禍の中にはまた福も交り候へども、所詮一生の間難儀だにせば、先には福あるべし。何の効驗もなきことに、觀音に頼みて福を求むるやうのことは、必ず、無益に存候。

尤も右の如く申候はば、身勝手なる申分、不孝なる申分と御存じあるべきか。こゝにまた論あり。易の道は滿盈と申すことを大いに嫌ふなり。お互に七人兄弟の中、拙者は罪人、艶は夭折、敏は啞子、ふざまの悪きやうなるものなれど、あと四人はいづれも可なりに世を渡られ、特に兄様をもじ、小田村は、兩人づつも子供があれば、不足は申されず。世の中の六七人も兄弟のある家を見較べよ。こ

七人兄弟
杉吉田民治
杉千代子
杉(兒玉兵衛)子
杉(門の妻)子
杉(小田村素太郎の妻)子
杉(天)子
杉(久美和子)子
杉(義助)子
杉(敏三郎)子

れほどにも参らぬ家の多きものぞ。近くは、そもじの家にて、高須^{たかす}などにも、兄弟の中には悪き人も随分あるなり。然れば、父母兄弟の代りに、拙者、艶敏の三人が禍を受くるにこそと思ひ候はば、父母様の御心も濟まる、譯には候はずや。且、杉は随分多福の家なれば、拙者の身の上よりは、却つて杉が氣遣なるものなり。拙者身の上は前に申す通りつめが牢死、牢死しても死なぬ仲間なれば、後世の福は随分あれど、杉は今にては御父子とも御役にて、何の不^{*}足もなき中なれば、子供等がいつもこのやうなるものと思ひて、昔山宅^{*}にて、父様、母様の晝夜御苦勞なされたることを話して聞かせても、眞^{*}とは思はぬほどなれば、この先五十年、七十年の事を篤と手を組んで案じて見られよ、氣遣なるものにては候はずや。去年も端午に客の多きを、人はめでたしと嬉しき顔をすれど、拙者は何分先の先が氣遣にてたまらぬゆゑ、始終稽古場に屈みて、人の知

御役
常道は治獄吏
民治は藩學の
助教

山宅
杉常道隱棲の
地、萩城の東
方護國山麓に
在った。

らぬ處にては、獨り落涙したるほどのことなりき。

若しや万^{*}一、小太郎が父祖に似ぬやうになることあらば、杉の家も危し^く、父様、母様の御苦勞を知つて居るもの、兄弟にても、そもじまでぞ。小田村にてすら山宅のことはよくは覺えて居るまじ。まして久坂などはなほ以てのこと。されば拙者の氣遣に觀音様を念ずるよりは、兄弟甥姪の間に、樂は苦の種、福は禍の本と申すことを篤と申聞かする方が肝要なり。なほまた一つ、拙者不孝ながら孝に當ることあり。兄弟の中に一人にてもふさまの悪き人あれば、あとの兄弟も自然と心が和ぎて孝行するやうになり、兄弟も睦じくなるものなり。これより拙者は兄弟の代りにこの世の禍を受合ふゆゑ、兄弟中は拙者の代りに父様、母様へ孝行してくる、がよし。さすれば、つゞまるところ、兄弟中皆よくなりて、果は父様、母様の御仕合、また子供が見習ひ候へば、子孫のためこれほどめで

小太郎
民治の子。

たきことはなきにあらざや。よくく御勤辨候うて、小田村久坂
なんどへもこの文御見せ、佛法信仰はよきことなれど、佛法に迷は
ぬやうに、心學本なりと折々御見候へかし。心學本に、
のどけさよ願なき身の神まうで
神へ願ふよりは、身に行ふが宜しく候。

一四 荒木田麗女

萩野 由之

女性の文學者といへば、紫式部・清少納言を始として、次々に尠くは
ないが、女性の歴史家を尋ねると甚だ尠い。紫式部に日本紀局の
綽名があるから、これは歴史家といつてもよいが、近い世では、伊勢
の荒木田麗女に指を折らねばなるまい。

麗女は伊勢の神官荒木田武遇の養女で、號を清渚といつた。山田
の御師慶徳三郎大夫、名は雅、號は如松といふ人の妻となつた。麗

萩野由之
新潟縣の人、
万延元年生、
文學博士、東
京帝國大學教
授。

荒木田麗女
文化三年(三
五)歿、年七十
五。
荒木田武遇
麗女の伯父、
麗女の實父は
伊勢の神官
谷權之進



女は文章の才があり、特に國文に通じ、歌や俳諧をも善くし、且博覽
強記だつたが、最も歴史に心を注いだ。大鏡の體に倣つて、高倉安
徳二代の事蹟を記して、月の行方二卷を著した。これは大鏡の續
篇としてその時代の史實を書いた「彌世繼」といふ書がその世に失
せたのを補はうがためである。後また増鏡の次を慶長まで書き
續けて、池の藻屑十四卷を著した。元弘以後およそ二百八十年が
間の歴史を簡要に書き上げた技倆は實に優れたものである。ま
して大日本史野史などの史書のまだ世に現れぬ時代に、此の如き
編輯はいかに至難の事業だつたらう。しかるに、その書の跋に
よると、月の行方は某年の七月七日に書き初めて八月十五日に終
へ、池の藻屑は明和八年の正月朔日に書き初めて二月十五日に終
へたと記してある。さすれば、十餘卷の國史を僅か一箇月半で脱
稿した迅速さは、新井白石の藩翰譜の外には聞き及ばぬところで、

大鏡
八卷、文徳天
皇から後一條
天皇まで十四
代の天皇・大
臣などのこと
を記してある
高倉天皇
第八十代。
安徳天皇
第八十一代。
増鏡
十卷、後鳥羽
天皇から後醍
醐天皇までの
ことを記して
ある。
慶長
(三五六一三
五七)
元弘
(一九九一
一九三)
大日本史
二百四十六卷
神武天皇から
後小松天皇ま
でのことを記
してある。
徳川光圀撰。
野史
後小松天皇か
ら仁孝天皇ま
でのことを記
してある。飯
田忠彦撰。

文章を草することの敏捷なことは、實に驚嘆に値するではないか。それゆゑ、積年の著述が極めて多く、清水濱臣が見たといつて記してゐるものだけでも、右の二史の外になほ十一種六十卷ある。元來麗女は氣位の高い性質で、一見識を有する女性だつた。當時伊勢には、本居宣長、荒木田久老など、知名の學者が盛に國學を唱へて、古史歌文の道を講じた時代だから、同じ道として就いて交りもすべきはずであるのに、一向その人達と交らず、却つて龍公美、野公臺、江村北海などの漢學者とばかり交際した。かゝる性質だから、自然、人を人とも思はぬ氣象だらうと思はれるが、その實は謙遜で、人に傲るやうなことはなかつたといふ。それは、三鏡に倣つて書いた書を池の藻屑と名づけたのは、堀河後度百首の、

伊勢ならば僻事ぞとも思はまし

やまとなるてふ美作の池

といふ歌に取つて、伊勢人の僻事した草紙といふ意を寓したといふのでも知ることが出来る。とかく文學に優れた女は、婦人の職たる縫織のことには拙劣なものであるが、麗女はこれにも大いに堪能だつたといふ。江村北海の記したものに、幼ニシテ穎悟保母ノ訓戒ヲ俟タズシテ婉婉聽從



麗女筆蹟

ナリ。組紐裁縫ヲ始トシテ、諸ノ女工精妙ナラザルハナシ。中饋ノ暇ニハ讀書ニ從事シテ、見聞愈博シとある。なほまた龍草廬の詩集に、伊勢ノ慶君ノ内子荒木田氏、親ラ一綿帛ヲ製シ、手ヅカラ蠻様ノ花紋ヲ繡刺シ、且新詩一章ヲ附ケテ惠マル。詩トイヒ、繡トイヒ、絢爛目ヲ奪ヒ、殆ド塵寰中ノ女巧ニアラス。称歎ノ餘リ、ソノ韻

明和 (二四四—二五三)
新井白石
川中世の學者、享保十年(一七三六)歿、年六十九。
藩翰譜
十三卷、諸侯の傳記沿革を記してある。
清水濱臣
江戸の人、徳川末期の國學者、文政七年(一八二六)歿、年四十九。
本居宣長
國學四大人の一、享和元年(一八一六)歿、年七十二。
荒木田久老
伊勢内宮の祠官、國學者、文化元年(一八二六)歿、年五十九。
龍公美
山城國伏見の人、寛政四年(一八二二)歿、年七十九。

野公臺
江村公臺、近江國彦根の人、天明四年(一八二四)歿、年六十八。
江村北海
京都の人、天明八年(一八二八)歿、年七十六。

下露やつも
りて庭に菊
の淵
麗女

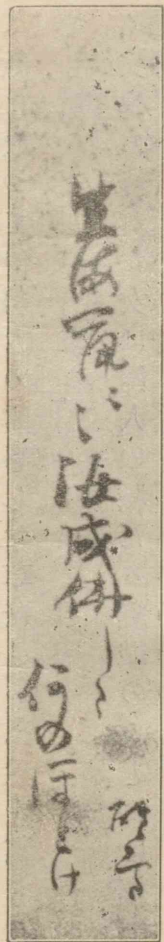
草廬
龍公美の號。

チ次ギテ厚意ヲ謝ス。」といふ詞がある。これによつてもその女紅に優れてゐたことが知れる。
夫の如松も學を好み古に通じてゐたから、夫妻相對して學問を樂しみ、また相携へて五畿内を漫遊し、諸名家を訪うて唱酬したことウツウもあつた。されば琴瑟相和して、貞淑の徳も備はつてゐたと思はれる。實に類稀な女性といつてよからう。今も宇治山田市の八日市場には、その家があるといふことである。

一五 明治大正の俳句

老梅の梢に遠し雪の山

醒雪



蹟筆雪醒

醒雪 佐々政一。
生海鼠々々
汝成佛した
何のほとけ
醒雪

税輕き十戸の村や桃の花
行きくしてひらりと返す燕かな

鳴雪
子規



蹟筆規子

鳴雪 内藤素行。
子規 正岡常規。
ゆふやけて
ぬ秋になり
子規

打水のしばらく藤の雫かな
た、かれて晝の蚊を吐く木魚かな
西瓜太郎躍り出でよと割りにけり

虚子
漱石
瓊音



蹟筆石漱

虚子 高濱清。
漱石 夏目金之助。
瓊音 沼波武夫。

口あいて佐渡が見ゆると涼みけり
雨に叫ぶ鴉あり银杏輝けり

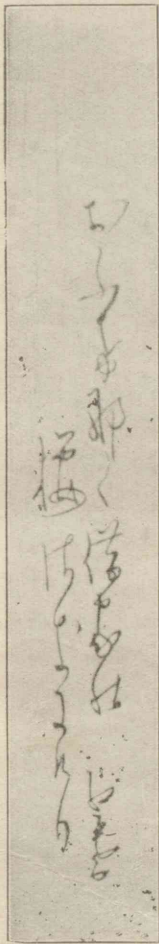
紅葉
井泉水

紅葉 尾崎徳太郎。
井泉水 萩原藤吉。

藝ありて輪卒召されぬ月の陣
木枯やすつくと立ちし富士の山

小波
竹冷

小波
巖谷季雄。
竹冷
角田眞平。



紅葉筆蹟

冬枯や墜き捨てたるこのあたり
汐木拾ふ浦の日和や冬の海

碧梧桐
紫影

碧梧桐
河東兼五郎。
紫影
藤井乙男。

一六 愛兒の死

西田幾多郎

回顧すれば、余が十四歳の頃、幼時から最も親しかつた姉を失うたことがある。余はその時、生來始めて死別のいかに悲しいかを知つた。余は亡姉を思ふの情に堪へず、また母の悲歎を見るに忍びず、人なき處に到つて、思ふまゝに泣いた。稚心に、若し余が姉に代

西田幾多郎
石川縣の人、
明治三年生、
文部博士、京
都帝國大學教
授。

つて死に得るものならばと、心から思うたことを今も記憶してゐる。近くは明治三十七年の夏、旅順の戦に、たゞ一人の弟が敵壘深く屍を委して、遺骨をも取れ得なかつた有様、こゝに再び舊時の悲哀を繰返して、斷腸の思がまだ全く消え失せないのに、今また己が愛兒の一人を失ふやうになつた。骨肉の情いづれも疎かなのではないけれども、特に親子の情は格別である。余はこの度生來未だ嘗て知らなかつた沈痛な經驗を得たのである。亡き我が兒の可愛いといふのにはなんの理由もない、たゞわけもなく可愛いのである。甘いものは甘い、辛いものは辛いといふの外はない。「これまでにして亡くしたのは惜しからう」といつて悔んでくれる人もある。しかしさういふ意味で惜しいといふのではない。「女の子でよかつた」とか、外に子供もあるから、などといつて慰めてくれる人もある。しかし、さういふことで慰められ

ることではない。ドストエフスキーが愛兒を失つた時、また子供
が出来たらう。」といつて慰めた人があつた。氏はこれに答へて、
「どうして、どうしても、ソニヤでなくては。」といつたさうである。親の
愛は實に純粹である。その間一毫も利害得失の念を挟む餘地が



西田幾多郎

ない。たゞ亡兒の倂を思ひ出すに
つれて、無限に懐かしく可愛さうで、
どうにかして生きてゐてくれ、ば
よかつたと思ふばかりである。若
きも老いたるも、死ぬのは人生の常
である。死んだのは我が子ばかりで
ないと思へば、理に於ては少しも悲しむべきところはない。しか
し、人生の常事であつても、悲しいことは悲しい。飢渴は人間の自
然であつても、飢渴は飢渴である。人は、死んだものはいかにいつ

ドストエフ
スキー
ロシヤの小説
家。(1821—1881)
ソニヤ
ドストエフス
キーの愛兒の
名。

ても還らないから、諦めよ、忘れよ。」といふ。しかし、これが親にとつ
ては堪へがたい苦痛である。「時はすべての傷を癒やす。」といふの
は自然の恵であつて、一方から見れば大切なことかも知れないが、
一方から見れば情ないことである。なんとかして忘れてたくない、
何か記念を残してやりたい、せめて我が一生だけは思ひ出してや
りたいといふのが親の誠である。

昔、ウォシントン、アービングのスケッチブックを讀んだ時、他の心

Washington Irving

Sketch Book

の疵や苦みはこれを忘れこれを治しようと思ふが、獨り死別とい
ふ心の疵は、人目を避けてもこれを温めこれを抱かうと思ふ。とい
ふ語があつた。今まことにこの語が思ひ合される。折にふれ物
に感じて思ひ出すのがせめてもの慰藉である。死者に對しての心
づくしである。この悲みは苦痛といへばまことに苦痛だらうが、
しかし、親はこの苦痛の去ることを欲しないのである。「死にし子

アービング
米國の文學
者、スケッチ
ブックはその
隨筆文集。(1793—1859)

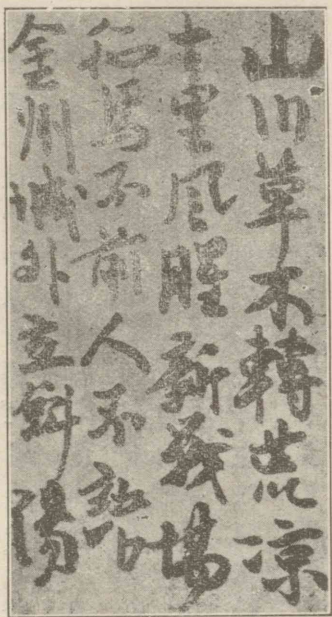
死にし子
をんな子の
ともに土佐日
記の中にある
紀貫之の語。

顔よかりき。^{*}をんな子のためには親をさなくなりぬべし。などと古人もいつたやうに親の愛はまことに愚痴である。冷靜に外から見たならば、たわいない愚痴と思はれるだらう。しかし、余はこの愚痴といふものの中に人情の味のあることを、この度つくづく悟つた。^{*}カントがいつたやうに、物には皆値段がある、獨り人間は値段以上である、目的その物である。いかに貴重なものでも、それはたゞ人間の手段として貴いのである。世の中に人間ほど貴いものはない。物はこれを償ふことが出来るが、いかにつまらない人間でも、一のスピリット^{spirit}は他の物を以て償ふことは出来ない。そして、この人間の絶對的價値といふことは、己が子を失うたやうな場合に最も痛切に感じられるのである。^{*}ゲーテがその子を失つた時、死を超越して、^{*}というて仕事を續けたといふが、ゲーテがこの語をなした心中には、もとより仰ぐべき偉大なものがあつたでも

カント
ドイッの哲學
者。(1791年)

ゲーテ
ドイッの文
豪。(1791年)

あらう。しかし、人間の仕事は人情といふことを離れて外に目的があるのではない。^{*}學問も事業も究竟の目的は人情のためにするのである。^{*}そして人情といへば、親が子を思ふより痛切なものはなからう。徒に高く構へて、人情自然の美を忘れるものは、反つてその性情の卑しいことを示すに過ぎない。^{*}征馬不前人不語、^{*}金州城外立斜陽の句があ



書並作典希木乃

征馬不前人不語、^{*}金州城外立斜陽の句があ

つて、愈々乃木將軍の人格が仰がれるのである。

とにかく、余は今我が子のはかない死といふことについて多大の教訓を得た、名利を思うて煩悶絶間のない心の上に、一杓の冷水を浴びせかけられたやうな心持がして、一種の涼味を感じるととも

征馬云々
乃木大將の
詩、乃木大將の
山草、木轉荒涼、
新戰場、征馬
不前人不語、
語、金州城外
立斜陽、
乃木將軍
陸軍大將乃木
希典、山口縣
四年、大正十

に、心の奥まで秋の日のやうな清く温かい光が照して、すべての人の上に純潔な愛を感じることが出来た。そして次の問題について特に心を動かしたのである。一體今まで可愛らしく話したり歌つたり遊んだりしてゐたものが、忽ち消えて壺中の白骨となるといふのは、いかなる譯だらうか。若し人生はこれまでのものであるといふならば、人生ほどつまらないものはない。こゝには深い意味がなくてはならない。人間の靈的生命はかくも無意義のものではない。死の問題を解決するといふのが人生の一大事である。死の事實の前には、生は泡沫のやうである。死の問題を解決し得てこそ、始めて眞に生の意義を悟ることが出来るのである。

一七 泥人形

和田とみ子

泥人形を可愛がり、しかも泥人形と同じく觸れ、ばすぐ毀れるや

和田とみ子
高知縣の人、
ドクトル、ハ、

4

うに育て上げられた日本婦人の中には、忘れがたい泥人形を故國に残しかね、それを持つて太平洋を越える人も少くない。自分も實にその一人で、學校時代に、親友とお揃ひに買った東人形オリエント人形をこつそりとトランクの底に秘めて、太平洋を渡航した。税關の役人がこれをThink見つけてにつこり笑つたのもその時のことだつた。

足掛六年のアメリカ生活は、泥人形のやうな日本婦人たる私をぐいぐいとAbandonいぢめた。泥人形が箱から出される機會が次第に少くなつて、遂には忘れられかゝつた。木綿の人形、石の人形、瀬戸物の人形、目の球を動かす人形、機械で走る人形、乃至は生きて物いふ人形の居る外國の社會では、泥人形は暫時は泥人形相應に珍しがられるけれども、少し荒く取扱はれると、すぐに毀れさうになる。水に入れたり、火で炙つたり、片手でぶらさげたりしようものならず、生命危篤に陥る。眞劍な仕事をする生きた人形の住む世の中

グ、フイロツ
フイロツ

では泥人形はどうも危険でたまらない。
 元來泥人形を持つてゐることは、生存競争の激しい社會では、全く贅澤だといふことを發見したので、自分は日本製の泥人形を箱の底に納めてしまつて幾年かの間一度も出さなかつた。嘗て親友とともに遊んだ泥人形としての泥人形遊は、たとひ泥人形はなくても忘れる氣遣はないと思つたから。
 さて、或日アメリカで生れた日本の小さい娘が病氣だといふので、何か慰めるものはないかと考へた末、思ひついたので例の泥人形である。泥人形といふといかにも泥だらけの穢い人形のやうに聞えるけれども、決してさうでなく、これはまた東京は選り抜きの三越三越製の上品な東人形なのである。トランクの底から出された一尺五寸の泥人形は、美しい緋友禪の着物を着て、花片のやうな美しい頬を嬉しさうに春の光に輝かせてゐた。

三越
 東京市日本橋
 區駿河町にあ
 る。

病床にある、まだ日本を見たことのない日本の小さい娘をどんなに喜ばせることかと想像しながら、自分はその東人形をもつて病床を訪うた。美しい泥人形を貰つた小さい娘は嬉しさうに飛びついて、その泥人形にキッスをしようとした。傍に見てゐたその母親は、日本のお人形はキッスをするやうには出来てゐないのよ」と説明せねばならなかつた。泥人形を手に持つた小さい娘の顔に、この時なんといふ失望の影の現れたことか。
 自分と一緒に喜びも悲しみもしてくれ、飛びついたり、抱いたり、キッスをしたり、顔を洗つたり、着物を着更へたり、繩飛をしたり、走りつこをしたりしてくれると思つた人形が、美しい姿はしてゐても、たゞおつとして眺められる外、何等の能も藝も有つてゐないことを知つた小さい娘の失望は大したものだつた。傍の母親はまた、「手がもげますよ。」そつとお取扱ひなさい。」と、何遍か注意せねばな

らない苦痛を豫想したことだらう。

なぜ日本の人形は泥人形なのだらうか、なぜ日本の人形は毀れるやうに出來てゐるのだらうか。藝術の國日本の産した人形は、また一つの藝術品に過ぎないのだらうか。その藝術品を保存するために、日本の娘は婦人は、泥人形よりも更に一段おとなしい弱々しい靜的な生き物とされる必要があるのらしい。

人間の藝術品を産出したことのない文化は、藝術品のために人間を勝手にする。生命の藝術は動にあつて、物質の藝術は靜にある。「靜中動あり」といふことは、死物の泥人形、または泥人形であるやうに育てられた日本婦人には許されない。生命のあるものは必ず動き出す。日本婦人はあまりに永く泥人形たるべく育てられ期待されて來たけれども、さていよいよどうも泥人形になりきれないことを白狀せねばならないやうになつた。それと同時に、來る

べき時代の子供達に、泥人形を弄ばせるのは可愛さうだと思ふやうになつた。あゝしてはいけない、かうしてはいけないといふ否定教育は、全く生命を殺すものだと思ふやうになつた。それは、泥人形のやうに育てられた子供達は、畢竟泥人形のやうに、水にも火にも堪へ得ず、奴隸のやうに、自由をも生命をも人の手に任せねばならない弱々しいものとなるからである。泥人形は奴隸生活の遺物である。

戦時中、ドイツの人形が造られなかつたために、アメリカあたりでも、日本製の瀬戸物の人形が見られた。けれども、その焼物の品質は到底ドイツ物とは比較にならないほど劣悪だつた。泥人形から石の人形への過渡期にある日本の工業は、それでも止むを得まい。願はくは、子供達のために、泥人形、遊べぬ人形を造ることを止めてほしい、すぐ毀れる泥人形は人形の使命を盡さないから。少

數の觀賞用としての外は、泥人形を造ることは止めて、玩具としての
の人形、眞に楽しむことの出来る頑丈な人形を造つてほしい。
私は思ふ、本當の人形を子供達に與へたい。そしてまた子供達、特
に娘達を自由、生命の溢れて生きる人間の藝術品として育て上げ
て、泥人形のやうな婦人にするには止めた。毀れ易い玩具を
子供達に與へる母や姉は、無意識の間に、破壊性を子供達の心の内
に養ひつゝあるのである。毀れるものに恐るゝ、觸れることを
教へるよりも、毀れないものを造ることを教へる方が大切ではあ
るまいか。毀れる輸出品を造る日本人は、往々にして外國人から
その誠意、商業道德をさへ疑はれる。毀れ易い瀬戸物、毀れ易い手
籠、毀れ易い人形を外國に出すことは、國家の恥辱ではあるまいか。
日本國民の誠意、友情、深切、それ自身を、かうした毀れ易い品物で象
徴させたくない。それには、まづ第一に泥人形や泥の婦人を育て

ないことが必要であるとともに、我々婦人もまたまづ泥人形的の
生活を止めねばならない。

一八 新文學の先驅者

水上瀧太郎

*與謝野寛氏の歌集「相聞」に、森鷗外先生の序文がある。その首に、「一
體、今、新派の歌と称してゐるものは、誰が興して誰が育てたか。こ
の間に『己だ』と答へることの出来る人は、與謝野君を除いて外には
ない。」といふ一節がある。試みに問へ、「一體、今、大正の文學と称して
ゐるものは、誰が興して誰が育てたか。」と。この間に『己だ』と答へる
ことの出来る人は、森鷗外先生を除いて外にはない。少くとも、先
生がゐられなかつたら、今日の日本文學を育てるには、なほ多くの
歲月を要したであらう。その先生が亡くなられた。
明治大正に亘つて、今日まで筆執るほどのものは、たとひ直接先生

水上瀧太郎 本名阿部章 藏、東京市十
年生、明治二十
命保險株式會
社員
與謝野寛 號は鐵幹 都府市の人、新
治六年生、明
派歌人、森鷗
外
名は林太郎、
島根縣の人、
醫學博士、陸
軍省圖書頭、
内務省圖書頭、
帝室博物館總
長、帝國美術
院院長、大正十
三年卒、六十

の門に出入して教を受けなかつたとしても、その影響を受けぬものは殆どないといつても差支ない。非凡な頭腦と比類のない精力とを以て、あらゆる方面の先驅をした先生の拓かれた道を、多数



森 太郎

のものは遙かに遅れて、とぼくと辿つて來たのである。

洵に先生は先驅者だつた。先驅者としての誇と、先驅者としての寂しさを、先生は生涯身にしみじみと味はれただらう。先生を想ふ時、私の胸には常にその孤獨

の姿が描かれる。

先生が始めて筆を執られたのは、明治十四年の頃だと聞く。自分などが多少なりとも理解を以て先生の文章を読むことの出来る

やうになつたのは、明治三十年代のことだから、先生が若々しい意氣を以て、頭の悪い世間の所論に容赦なく痛撃を加へられた時代のことは、明白には知るよしもないが、察するに、知識欲に燃え、學問の研究に心を傾け、且藝術家としては、鋭敏な神經に觸れる一切のものに活々とした感應を持てあますほど持つてゐられた先生にとつて、論ずるもの自身の頭の中でさへはつきりしない思想と、その發表された論理形式の矛盾とは、見るに見兼ね、許すに許しがた

いものだつたに違ない。
先生のお書きになつたものを、自分が初めて讀んだのは、幾歳の年だつたか確とは記憶せぬが、兄の本箱の「めざまし草」を窃み見たことは明かに覚えてゐる。子供の時から穎才を以て称された兄は、藝術に對する強い憧憬と正しい理解とを有つてゐた。七つ違の弟に生れた自分は、この兄のお蔭で、「少年世界」に對する興味を失ふ

兄 名は泰二、明治十三年生、日本銀行員、めざまし草 月刊の文學雜誌、少年世界 月刊の少年雜誌

頃、一足飛びに一流の作家の作品に接することが出来た。兄の本箱には、紅葉、露伴、鷗外、二葉亭、柳浪、鏡花、その他の優れた當時の諸家の作品とともに、その頃文壇の權威だった「新小説」、文藝俱樂部、「新著月刊」などがいつばい詰つてゐた。自分の茶碗や箸は、必ず庭の清水で手づから洗はねば承知しなかつたほどに潔癖だった兄は、また此等の本を大切にすることが一通りではなかつた。折目もつかず、汚れ目も見えない本が、文學好きの少年にとつては、涙ぐましいほど懐かしい紙の匂を罩めて、兄の勉強部屋の押入の中の本箱に整然と納められてあつた。餓鬼大將になつて、近所の子供を集めて、角力を取り、陣取をして、一日中あばれ廻る自分だったが、時には屢、人目を避けて、大人の讀む本を窺み見る興味は早くから有つてゐた。他人が手をつけて汚すことを怖れる兄の留守を窺つて、自分はその本箱の本を殆ど悉皆讀んだ。「めざまし草」な

紅葉 尾崎徳太郎。
露伴 幸田成行。
二葉亭 長谷川辰之助。
柳浪 廣津直入。
鏡花 泉鏡太郎。
新小説 文藝俱樂部・新著月刊ととも月刊の文藝雜誌。

どはむづかしくて解らなかつたが、それでもこれを愛讀したのを考へて見ると、一面甚だ子供らしかつた自分も、一面甚だ早熟だつたものらしい。

紅葉先生の偉さは解つても、鷗外先生の偉さは解らなかつた。何かの折に、兄が紙片に書いた小説家番附といふものを見ると、鷗外先生が横綱か張出大關になつてゐたので、そんなに偉いのかと驚いて、先生の作品を繰返して讀んだけれど、やはり解らなかつたことを覚えてゐる。まだ小學時代のことだつた。

今考へても、その時の歡喜がまざくと蘇つて、胸が躍つて、涙をさへ催しかねないのは、即興詩人を讀んだ時のことである。その時は既に中學に入つてゐた。所々讀めない字はあつたが、曾て一度も見たことのない清新な文體を幾度朗誦したか解らぬ。好きな箇所は語記した。恐らくは、自分達と時代を同じうする詩人小説

即興詩人 アンデルセン (1805-1875) 原著、森鷗外 譯、二卷、明治三十五年春陽堂發行。

家、その他文藝の愛好者で、曾て「即興詩人」を讀んだことのない人は極めて稀で、また一度でもこれを讀んだ人は、その若かつた日を追憶して、歡喜の波を胸に打たせないものはなからう。

「即興詩人」の翻譯は原作以上と稱されてゐる。論を好むものは、翻譯は原

古い手帳から

(其九)

M R

Augustinus

中世の神の國と云ふ思想は四五世紀の間に出来た

Aurelius Augustinus *De civitate Dei* (libri

XIII) として代表エーのことが出来る。

森鷗外筆蹟

古い手帳から

(其九) M. R.
Augustinus

中世の神の國と云ふ思想は四五世紀の間に出来た Aurelius Augustinus の書 *De civitate Dei* (libri XII) を代表せしめることが出来る。

といはれる翻譯は、忠實な翻譯でもなく、名翻譯でもないといふだらう。現にそんなことを利口ぶつていつたものもあつた。そんな

作以上

きで、原

へるべ

まに傳

るがま

作をあ

譯は原

なことを言ふものには言はせておかう。自分達は、原作の内容を盛るのに、更に適切な文體を以てせられた鷗外先生の一事業として、また自分達の文學的生涯に於て比類のない歡喜に打たれた記念として、永久に「即興詩人」を讚美しよう。
*ハルトマンの審美學説を紹介し、洒落と機智と漫罵との外には批評の言辞を知らなかつた人々に嚴正な批評の根據を知らせられた先生は、一方に於ては、自ら新體の創作を發表し、世界各国の小説、戯曲、詩歌を翻譯して、文學の模範を示された。「水沫集」^み「つき草」^か「かげ草」などは、いづれも文學に志すものに深い感動を與へ、また彼等が行くべき道を指し示した偉大な記念塔である。
今更茲に先生の自分達に残された功績を事細かに述べる必要はないが、もう一度、今日の文學は先生に育てられたものであるといふことを繰返して言つておく。若し明治文學史から先生の存在

ハルトマン
ドイツの哲學者
(1832-1906)

を完全に消すことが出来るなら、その文學史の殆ど全部が書き直されねばならない。即ち今日の創作評論の形式は、よほど現在のそれと違つたものとなつてゐるだらう。違ふといふよりも、發達の初期をさまよふものといつた方が適切かもしれない。それにも係らず、世間は先生に對して、眞情を籠めて感謝の意を表したらうか。先生の著作が専門家に與へた偉大な影響に引換へて、一般受けのしなかつたことを以てすれば、否と答へる方が適當である。文壇のものさへ先生に追隨することはむづかしかつた。まして所謂民衆は先生を理解し味得することが出来なかつた。これやがて先驅者の免れることの出来ない運命だつた。

一九 サフラン

森 鷗 外

名を聞いて人を知らぬといふことが随分ある。人ばかりではな

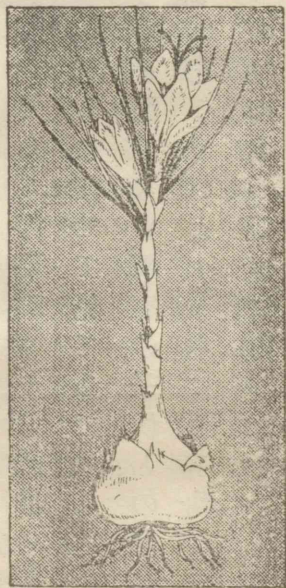
い、すべての物にある。

私は子供の時から本が好きだといはれた。少年の讀む雑誌もなければ、巖谷小波君のお伽噺もない時代に生れたので、お祖母様がお嫁入の時に持つて來られたといふ百人一首やら、お祖父様が義太夫を語られた時の記念に残つてゐる淨瑠璃本やら、謠曲の筋書をした繪本やら、そんなものを有るに任せて見てゐて、仄といふものを揚げない、獨樂といふものを廻さない、鄰家の子供との間に何等の心的接觸も成り立たない、そこでいよゝゝ本に讀み耽つて、器に塵が附くやうに、いろゝの物の名が記憶に残つた。そんな風で、名を知つて物を知らぬかたはになつた。大抵の物の名がさうである、植物の名もさうである。
父は所謂蘭醫である。オランダ語を教へてやらうといはれるので、早くから少しづつ習つた。文典といふものを讀む、それに前篇

巖谷小波
名は季雄、
京市の人、
治三年生、
伽噺作家、
お明東

父
名は静男。

と後篇とがあつて、前篇には語を説明し、後篇には文を説明してある。それを讀んでゐた時、辞書を貸して貰つた。蘭和對譯の二冊物で、大きい厚い和本である。それを引繰返して見てゐる中に、サフランといふ語に逢着した。まだ植物學などの我が國に開けない時代の辞書だから、音譯に漢字が當て箝めてある。今でもその字を記憶してゐるから、こゝに書いてもよいが、サフランと三字に書いてある初の一字は、所詮活字には有り合せまい、よつて扁旁を分けて説明する、水の扁に「自」の字である。次が「夫」の字、また次が「藍」の字である。



サフラン

「お父さん、サフラン、草の名」としてありますが、どんな草ですか。」

「花を取つて、干して、物に色を附ける草だよ。見せてやらう。」
 父は藥簞笥の抽斗から、縮れたやうな黒ずんだ物を取り出して見せた。父も生の花は見たことがなかつたかも知れない。私にはたまたま名ばかりでなくて、物が見られたが、干物しか見られなかつた。これが私のサフランを見た初である。
 二三年前だつた、汽車で上野に着いて、人力車を借つて團子坂へ歸る途中、東照宮の石壇の下から、薄暗い花園町にかゝる時、道端に筵を敷いて、球根からすぐに紫の花の咲いた草を列べて賣つてゐるのを見た。子供から半老人になるまでの間に、サフランに對する知識はあまり進んではゐなかつたが、圖譜で生の花の形だけは知つてゐたので、「おや、サフランだな」と思つた。花卉として、東京でいつごろから弄ばれてゐるか知らない。とにかく、サフランを賣る人があるといふことだけ、この時始めて知つた。

團子坂 本郷區駒込にある、もと菊の住所のある處。
 東照宮 上野公園にある。
 花園町 上野公園の西、不忍池の畔。

この旅はどこへ往つた旅だつたか覚えぬが朝、旅宿を立つたのは霜の朝だつた。もう温室の外にはあらゆる花がなくなつてゐる頃のことである。茶梅さくらんぼも茶の花もない頃のことである。

サフランにも種類が多いといふことは、これもいつやら何かで讀んだが、私の見たサフランはひどく遅く咲く花である。しかし、極端は相接觸する、ひどく早く咲く花だともいはれる。水仙よりも

ヒヤシントより早く咲く花だともいはれる。

去年の十二月だつた、白山はくさん下の花屋の店に、二錢の正札附で、サフランの花が二三十千からびた球根から咲き出たのが並べてあつた。私は散歩の足を止めて、球根を二つ買つて持つて歸つた。サフランを我が物としたのはこの時である。私は店の爺ぢやうさんに問うて見た。

「爺さん、これは土に活けておいたら、また花が咲くだらうか。」

「え、好く殖えるもので、來年は十倍になりまさあ。」

「さうかい。」
私は買つて歸つて、鉢に少しばかり庭の土を入れて、それを埋めて書齋に置いた。

花は二三日で萎れた。鉢の上には、袂屑のやうな室内の塵が一面に被さつた。私は久しく目にも留めずにゐた。

すると、今年の一月になつてから、緑の糸のやうな葉が叢つて出た。水もやらずにおいたのに、活氣に満ちた青々とした葉が叢つて出た。物の生ずる力は驚くべきもので、あらゆる抵抗に打勝つて生じ、伸びる。定めて花屋の爺さんのいつたやうに、段々球根も殖えることだらう。

硝子戸の外には、霜雪を凌いで福壽草の黄色い花が咲いた。ヒヤシントなども花壇の土を裂いて葉を出し初めた。書齋の内には、

ヒヤシント、唐水仙、風信子、白山、小石川區白山神社のほとり。

サフランの鉢が相變らず青々としてゐる。鉢の土は袂屑のやうな塵に掩はれてゐるが、その青々とした色を見れば、無情な主人も折々水ぐらゐやらずにはゐられない。これは目を娛ませようとすゝる利己主義だらうか。それとも、私なしに外物を愛する愛他主義だらうか。人間のすることの動機は縦横に交錯して伸びるサフランの葉のやうに、容易には自分にも解らない。それを強ひて、胭脂を舐めた蛙が腸をさらけ出して洗ふやうに、洗ひ立てをして見たくもない。今私がこの鉢に水を掛けるやうに、物に手を出せば彌次馬といふ手を引込めてをれば獨善といふ、殘酷といふ、冷淡といふ。それは人の口である。人の口を顧みてゐると、一本の手の遣場もなくなる。

これはサフランといふ草と私との歴史である。これを讀んだら、いかに私のサフランについて知つてゐることが貧弱だかが解る

だらう。しかし、それほど疎遠なものにも偶、何かの接觸はあるやうに、サフランと私との間にも接觸點がないことはない。宇宙の間で、これまでサフランはサフランの生存をしてゐた、私は私の生存をしてゐた。これからもサフランはサフランの生存をしていくだらう、私は私の生存をしていくだらう。

二〇 スウイスの山水

吉江 孤雁

私を待つてゐた馬車は、更に^{Geneva}ゼネヴァの郊外へ出て、近郊を一廻りして歸ることになつた。一人旅の愉快さは、どこへいつても、自分の思ふまゝになることである。

北の郊外や、遠く^{Mont Blanc}モンブランの見えるあたりまで來ると、地勢が一段高く、^{Leman}レマン湖に沿うた^{Savoie}サヴォアの佛國の岸邊も、對岸の^{Lausanne}ロザンヌの市街も、手に取るやうに見える。モンブランの美しい姿

吉江孤雁 名は喬松、長野縣の人、明治十三年生、早稲田大學教授。ゼネヴァ、スウイス國最西端の都會。

レマン湖、ゼネヴァ湖、長さ四十五哩、幅最大九

は、私は幾度見たことであらう。前二回の夏は、ドオフィネの山奥から、シヤンペリヤから、アヌシーから見た。丁度信州の中央で見^{乗鞍岳}る乗鞍岳を幾倍か大きくしたやうな、嚴かな、そして美しい、氣高い山の姿は、いつも人に崇敬の念を起させる。



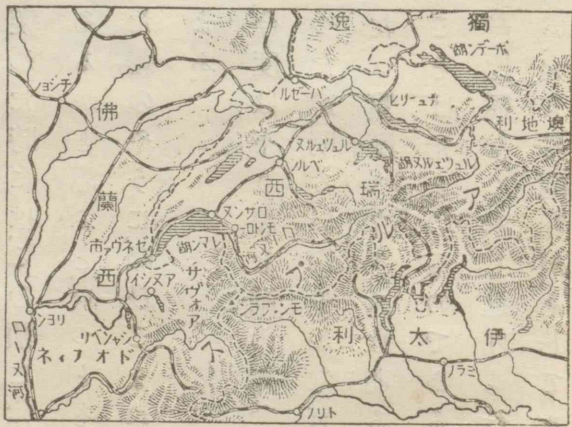
雁 孤 江 吉

を感じる。なごやかで大きく、しなやかで引締つた心、高きを望んでゐるけれどもあせらず、刻々に變るけれども常住の相を保つモンブランよ。誠の慈愛の心とはかやうな姿をいふのだらう。常に

淡青い八月空の下に、浮んだやうに立ち現れるモンブランよ。私は涙ぐましい心持で、遠く御身の前に拜跪せずにはゐられない。御身に對すると、我が命がおのづからな姿に立返るの

乗鞍岳 岐阜縣にある、長野縣の境、海抜約九〇〇尺。

若くて、永久に生きる御身の語るのを聴くと、轉瞬の生を享けてゐる我々の心にも、一時常住、永劫の眞諦が呼び覺され、そこに暫しの安定を興へられるのである。五年に亘る大戦も、一千万に近い人間を死傷させた大殺戮も、御身の純潔の寸毫をも汚すことは出来なかつた。いつも處女のやうなほにかみをもつて、連山の奥に、遠く眞白な姿を漂はせてゐる御身の存在は、人間の血に汚された歴史の範圍を超越してゐる。そして、時として思ひがけない方角にその姿を浮ませて、無言の力で人間の喧噪を取静める。



軽い綿雲が空のどこからか生れ出て、霞んだやうにこの山の面に
かゝつていく。薄絹のヴェールのやうな、この不思議な力で引寄
せられる浮生物は、そこを棲處として、さまよひ歩く浮浪人の宵々
毎に立返つて来るやうに、浮動の生活に疲れた時には、この懷に休
むのである。そして、暫くそこに休んでゐるかと思ふと、いつとも
なしに、その雲は、山の面に、鏡面にかゝつた霧のやうに、吸ひこまれ
るのか、吹き消されるのか、無くなつてしまふ。

私は立つてゐた草の丘の上から降りて、今度は下り路を、湖の岸へ、
佛國の國境近くまで馬車を走らせていつたが、明るい軽やかな氣
分は、夏の旅行者の味ふ獨得のものだつた。實際スウイスは明る
い國だ。光の國スウイスにおいて、湖水こそは光そのものである。
世の中の美しいものの中で、二つのものが比類なく成し遂げられ
てゐる。レマンの湖水には、美しい、氣高い、大きな調和が、そしてル



レマン湖のダム

ユツェルヌの湖水には、壯美がなされてゐる。と、^{Michalet}ミシユレはいつた
が、^{Lucerne}レマン湖は殊にこの明るさの感じを興へる。

レマンの水は他の湖水とは異つて青く輝いてゐる。碧い色でな
く、むしろ淡青に澄んだ水面が、柔かな笑と明るい抱擁とを見せて
ゐる。^{Als}アルプ連嶺の中を潜つて出て来た^{Rhone}ローヌは、こゝへ来て暫
く休息し、^{Als}復び若々しい勢を回復して、中部のフランスへ跳り出し
ていくのである。

ゼネヴァから仰ぐ大空は、やゝ我が日本の高原地の空に似て、光輝
のある深みを見せてゐる。それが對岸の丘の上へ、天の裾が白く
薄れてかゝり、ロザーンヌの市街の輝きをその空色の中へ包むや
うにしてゐる。湖水は眠つてゐるでもなく、目覺めてゐるでもな
く、湖面全體から一種のなごやかな樂の音を立てて、光と溶けあひ、
人の心をその中へ巻きこみ、伸し、漂はせる。悲みといふにはあま

ミシユレ
フランスの歴
史家。(1798—
1874)

ローヌ
佛國四大河の
一、リヨン灣
に注ぐ。長さ
五〇四哩。

りに淡い、疲といふにはあまりに甘い、一種の溶けた心持が、その光
とともに、その樂の音とともに、水面を這つていく。



シラロ、シマロ

えなかつた、水色服の佛國兵の突進も
なかつた。前年の夏までは、最後の手
段として、獨軍がスウイスの中立を侵
しはしまいかとの懸念がパリ人を少
からず脅威してゐたが、遂にその愚舉
は演じられずに終つた。そしてレマ

ンはいつも平和の姿を湛へ、ゼネヴァはいつも平和の都市として、
戦争を超越して存してゐた。戦時中、どんなにか我々は努力して、
ジュルナル、ドウ、ジュネーヴを手に入れて讀まうとしたことだら
う、戦線を隔てた両側に於ける眞の平和論者の聲を聽かうとする

のに、どんなにか骨を折つたことだらう。小さくはあるが、この山
間の國スウイスは、勇敢な、そして平和を守る搖籃の國である。こ
の山間の勇者は、幾度となくその懷から世界の革命者を送り出し、
またその人々に避難所を提供した。* カルヴィンに休息の地を與
へ、* ヴォルテールに避難所を供し、* ルソーを送り出し、* スタール夫人
をはぐくみ育てた。ゼネヴァは、今その懷に、この湖水の奥深くに、モ
ントローの近くに、眞の平和の偉人ロマン・ロランを安らかに庇護
してゐるではないか。私は明日この湖水を越えてその人に逢ひ
にいくことを思ふと、そゞろに胸の躍るのを感じないわけにはい
かなかつた。

二一 夏末の接心

杉村楚人冠

ふと庭の面を見やると、崖の下に橙の樹があつて、今八月半ばとい

カルヴィン 佛國の宗教改
革者。(1509-
1564)
ヴォルテール 佛國の歴史
家・詩人・作劇
家。(1694-
1778)
ルソー 佛國の哲學
者・散文家。
(1712-1778)
スタール夫
人 フランスの文
學者。(1732-
1817)
ロラン フランスの評
論家。(1866-)

杉村楚人冠 名は廣太郎、
和歌山縣の
人、明治五年
生、東京朝日
新聞社員。

庭 鎌倉にある圓
覺寺の塔頭、
燈庵の庭。

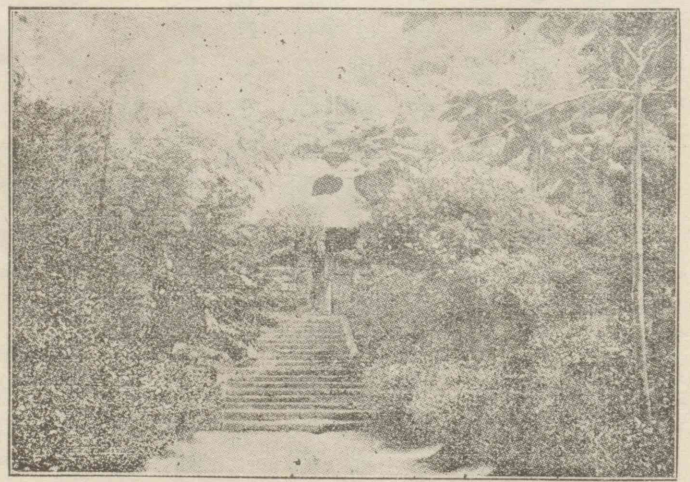
田阪

ふのに、青くなつた橙の實が、枝もたわゝに累々と生り下つてゐる。先年私のゐた頃も、丁度この橙の青くなつて枝に残つてゐる夏の眞盛りだつた。

それは夏末の接心の始る前だつた。夏末とは一年を雪安居雨安居と分けた雨安居の終で、接心とは一週間制を結んで坐禪に従ふことである。禪僧の行住坐臥、いづれ心を接しない時はあるまいが、接心の間は特に精神を抖擻し、万事を抛擲してかゝるのである。この間には、參禪の度數も増され、坐禪の時間も延ばされ、禪堂は殆ど晝夜僧俗のために公開されて、こゝに出入するものは、必ずしも堂内の僧だけに限らぬとしてゐる。今年などは、山内の塔頭にそれぞれ分宿して、この接心に加はつた俗人がかれこれ五十餘人もあつたさうだが、私等の時も二三十人はあつた。學生もゐる、實業家もゐる、役人もゐる、學校の先生もゐて、隨分賑はしかつた。中に

は女もあつた。男をひとしなみに居士といふやうに、かやうな女を禪子といふ。これを「ぜんこと」讀むからをかしい。

かういふ社會では、修行の進む進まぬに係らず、古くからゐるものほど幅を利かせる。居士でも、古いものは久參底などと唱へられて、私等新參底を馬鹿にしてかゝつたものだ。幸ひこの久參底の中の友人が、前以て私等のために、宿所や食事や入門の手續など、一世話をしてくれたので、私と今一人同窓の友とは、來るとそのま



門山菴燈續

まこの續燈菴の客となつて、接心の前の日、隱寮で老師に相見を遂げた。

老師といふのは、専門道場の總大將で、そのある所を隱寮といひ、これに面謁することを相見といふ。その時の老師は、前圓覺寺派管長釋宗演師であつた。若い人であつたが、やはり敬称して老師と唱へた。僧堂の坊様達は、ずつと碎けて、これを「おやぢ」といふ。氣取つては「老漢」などといふ。時の隱寮を「楞伽峯」と唱へたので、「楞伽老師」ともいつた。號を取つていへば、「洪嶽禪師」「禪宗臭くいへば圓覺老漢」。これにこの邊の村人の唱へる「管長さん」を加へれば、「いやはや禪宗坊主の名前ほど、ごてくさと澤山なものはない。管長といへば眞宗本願寺管長などと來ると、同じ管長ながら、正しく王侯將相の豪華を極めてもあるようが、臨濟宗圓覺寺派管長は、流石に枯淡の生を命としてゐるだけあつて、万事が質素なものだ。なんで

圓覺寺
臨濟宗圓覺寺派の大本山。
宗演
俗名一瀬常吉、福井縣の人、名僧、大正八年歿、年六十一。

眞宗
俗に一向宗、門徒宗親鸞の開基。
本願寺
東本願寺・西本願寺。

もその頃管長が管長として受ける給料は、一箇月大枚金五圓だとか聞いてゐた。

相見が滞りなく終つて後、私等はこの續燈菴に歸つた。いよいよ明日から接心の始りといふので、何かと用意が忙しい。まづ着流しではいけぬといふから、古い小倉袴を一着買ひ調へる。何より

大事なのは、坐蒲團が二枚要ること、一は坐蒲團として敷き、一は二つに疊んで尻の下に敷くのだ。これを敷かぬと、結跏趺坐した時、腰がぐらついて、心を氣海丹田の下に落着けることが出来ぬと、例の久參底が説明してくれた。また、禪堂の中では、團扇や扇子



釋宗演筆蹟

大學之道、
在明明、
德在親、
民在止、
至善。
釋洪岳敬書

臨濟宗
禪宗の一派。

が使へぬから、拂子はらひを一本借りて來る。これで用意は出來た。試みに脊梁を豎起し、牙関を咬定し、眼を半眼に開いて坐つてみると、なるほど俗惡私のやうなものでさへ、大分勿體らしい佛様のやうな顔になる。かうして今は接心を待つまでとなつた。
私等居士こそ、投宿も、相見も、友人の世話で苦もなく一日の間に出來たが、これが雲水の僧の身となると、行脚から投宿掛錫くわしやく參堂相見と、なか／＼一通りの手數ではない。

二二 芳流閣上の格闘

曲亭 馬琴

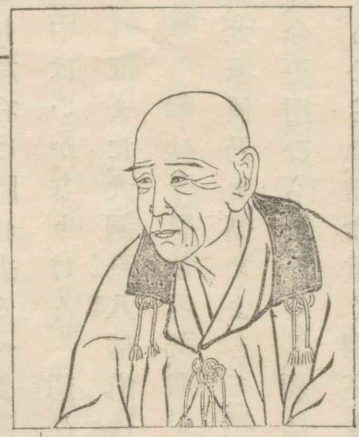
古の人謂はずや、禍福は糾ふ纏の如し。と、人間万事往くとして塞翁が馬ならぬはなし。こは福の倚るところ、はた禍の伏すところ、彼にあれば此にあり、とは思へども豫ねてより、誰かその極を知らん。隣むべし犬塚信乃は、親の遺言記念の名刀、心にしめつ身につけつ、

曲亭馬琴
本名滿澤、
徳川末期の小
説家、嘉永元
年(一八二〇)
年八十二。
禍福如糾纏
史記

倚、福分禍之
所伏。命不
其極(老子)
古河
下總國。

艱苦の中に年を経て、得がたき時を得てしかば、はる／＼古河へ齋して、名を揚げ家を興すべかりしその福は、禍とふりかはりたる村雨の刀は故のものならで、我が身を劈く響とぞなりし、憾をこゝに釋くよしもなく、絆急こまにして意外にあり。僅かに當座の辱を避けばやと思ふばかり、夥多おほまの圍を切り開きて、芳流閣の屋の上に登れども、左右に脱れ去るべき道のなければ、そこに必死を窮めたる、心の中はいかなりけん。想ひやるだにいと痛まし。
さればまた、犬飼見八けんぱち信道は、犯せる罪のあらずして、月來獄舎に繋かれし、禍は今恩赦の福、我が縛の索解けて、人にぞかゝる捕手の役義、犬塚信乃を搦めよとて、慙に擇み出されつ。他の憂を身の面目に、今更用ひられんこと、願はしからずと思へども、辞みて許さるべくもあらぬ、君命重く彌高き、かの樓閣は三層なり。その二層なる櫓の上まで、身を霞ませて登りて見れば、足許遠く雲近く、照る日烈

しく堪へがたき、時は六月二十一日、昨日も今日も乾蒸の燄熱を渡



琴馬亭曲

馬琴筆蹟

天保十一年庚子五月二十五日
著 馬亭琴
筆 福原大吉利

る敷瓦は、凸凹隙なく波濤に似て、
下には大河滔々たる、こゝ生死の
海に朝る流は名に負ふ坂東太郎、
水際の舟楫緒絶え、進退既に谷
りし、敵にしあればいかで我、繋ぎ
留めんと、颯の樹傳ふごとくさら
さらと、登り果てたる三層の屋根
にはまぶしさすよしもなく、かた
みに隙を窺ひつゝ、にらまへ合
て立つたるありさま、浮圖の上な
る鶴の巢を、巨蛇の狙ふに似たり
けり。

坂東太郎
利根川、坂東
系、野の、主水

天保十一年
庚子五月
月二十五日
稿了
著 福原大
筆 福原大
吉利市

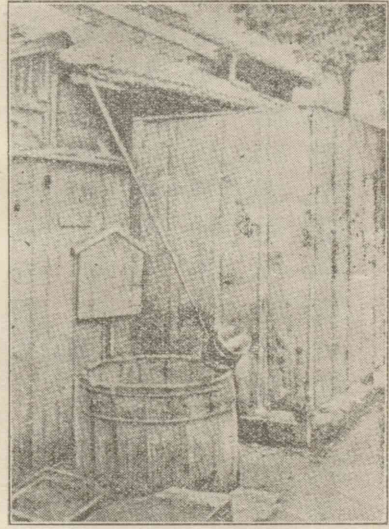
廣庭には成氏朝臣、横堀史在村等の老黨若黨圍繞せし、床几に尻を
打掛けて、勝負いかにと見上げたり。芳流閣の東西には、腹巻した
る許多の士卒、槍長刀をきらめかし、或は箭を負ひ弓杖突き立て、組
んで落ちなば撃ちこめんと、項をそらしてこれを觀る。しかのみ
ならず外の方は、連綿として杳かなる、河水めぐりて砌を浸せば、た
とひ信乃武事長け、膂力衰へず、よく見八に捷ちたりとも、墨氏が飛
鳶を借らざれば、虚空を翔るべくもあらず、魯般が雲の梯なければ、
地上に下るべくもあらず。渠鳥ならずも羅に入りぬ、獸ならずも
狩場に在り。三寸息絶ゆれば、穢みな休まん、脱れ果てじと見えたり
けり。
その時信乃思ふやう、初層二層の屋の上まで、追ひのぼらんとせし
兵等を、斫り落しつる後は、絶えて近づくものなきに、今たゞひとり
登り來ぬるは、よに覺ある力士ならん。しやつはこれ膳臣巴提便

成氏
古河公方足利
成氏

墨氏
墨翟、周代の
思想家、嘗て
宋城を固守し
て楚軍を却け
た。
魯般
公輸般、墨子
と同時の人、子
つて宋を攻め
た。

膳臣巴提便
欽明天皇七年
（二二五）百濟に
使した時、濟に
穴に入つて虎に
人を刺し殺した

が、虎を暴にする勇あるか、また富田三郎が鹿の角を裂きたる力あるか。遮莫ひとり敵なり、引組んで刺し違へ、死するに難きことやある。よき敵ござんなれ、目に物見せん」と血刀を、袴の稜もて押拭ひ、高瀬の如き方桴に、立つたるまゝに寄するを俟てば、見八もまた思ふやうかの犬塚が武藝、勇悍もとより万夫不當の敵なり。さりとても搦め兼ねて、他の援を借ることあらば、獄舎の中よりこの役義に、選み出されしかひもなし。搦め捕るとも撃たるとも、勝負を一時に決せんものを、と思ひにければちつとも擬議せず、御謔さふ」と呼びかけて、拿つたる十手を閃かし、飛ぶが如くに方桴の、左の方より進み登り



(町田飯區町麴市京東)宅舊の琴馬

富田三郎和義盛の
士、源實朝の
二尺方七寸の
一、大鹿角二箇を
た一度に折つ

て、組まんとすれど寄せつけず、心得たり。と鋭き太刀風に、撃つをはつしと受け留めて、拂へば透さず切りこむ刀尖支へて流す一上一下、下がる藁を踏み留めて、頻りに進む捕手の秘術、あなたも劣らぬ手練の働嵩より落す太刀筋を、あちこち外す虚々實々、未だ勝負も判かざれば、廣庭なる主従士卒は、手に汗握らざるものなく、瞬もせず氣を籠めて、見るめもいと遙かなり。さるほどに犬塚信乃は、悔りがたき見八が、武藝に敵を得たりけりと、思へば勇氣いやまして、刀尖より火出づるまで、寄せては返す太刀音掛聲、兩虎深山に挑む時、鏗然として風起り、二龍青潭に戦ふ時、沛然として雲起るもかくぞあるべき。春ならば峰の霞か、夏ならば夕の虹か、と見るばかりなる、いと高き閣の棟の上に、死を争ひし爲體、よに未曾有の晴業なれば、見八は被籠の鎖、肱當のはづれを、裏かくまでに切り裂かれしかど、太刀を抜かず、信乃は刀の及も續か



芳流閣の上の搭閣(南總里見八犬傳)

で、初に淺痕を負ひしより、次第に疼みを覺ゆれども、足場を守りて、
 撓まず去らず、疊みかけて撃つ
 太刀を見八右手に受け流して、
 返す拳につけ入りつゝ、やつと
 かけたる聲とともに、眉間を望
 みて礮と打つ、十手を丁と受け
 留むる、信乃が刃は罅際より、折
 れて遙かに飛び失せつ。見八
 得たりと組むを、そがまゝ、左手
 に引きつけて、かたみに利腕し
 かと取り、振ぢ倒さんと曳聲合
 せて、揉みつ揉まるゝ力足、これ
 かれ齊しく踏み込らして、河邊

のかたへころ／＼と、身を輾ばせし覆車の米苞、坂より落すに異ら
 ず。勾配けはしき棧閣に、削り成したる囊の勢、止るべくもあらざ
 めれど、かたみに拿つたる掌を緩めず、幾十尋なる屋の上より、末遙
 かなる河水の底には入らで程もよし、水際に繋げる小舟の中へ、打
 累なりつゝ、どうと落つれば、傾く舷と立つ浪に、ざんぶと音する水
 煙、纜ちやうと張り切りて、射る矢のごとき早河の、直中へ吐き出さ
 れつ。しかも追風と退く潮に、誘ふ水なる下り舟、往方も知らずな
 りにけり。

二三 行く川の流

鴨 長 明

行く川の流は絶えずして、しかも元の水にあらず、よどみに浮ぶう
 たかたはかつ消えかつ結びて、久しくとゞまることなし。世の中
 にある人と住家とまたかくの如し。玉敷の都の中に棟を並べ囊

鴨長明
 鎌倉時代の文
 學者、建保四
 年(一一三二)
 年六十三歿

を争へる尊き卑しき人の住居は、代々を経て盡きせぬものなれど、これをまことかと尋ねれば、昔ありし家は稀なり。あるは去年破れて今年は造り、あるは大家滅びて小家となる。住む人もこれに同じ。處もかはらず、人もおほかれど、いにしへ見し人は二三十人が中に僅かに一人二人なり。朝に死し夕に生るゝならひ、たゞ水の泡にぞ似たりける。知らず、生れ死ぬる人、何方より來りて何方へか去る。また知らず、假のやどり誰がために心を悩まし、何にやりてか目を悦ばしむる。この主人と住家と無常を争ひ去るさま、いはば朝顔の露にことならず。あるは露落ちて花残り、残るといへども朝日に枯れぬ。あるは花は萎みて露なほ消えず、消えずといへども夕を待つことなし。

凡そ物の心を知りしより以來、四十あまりの春秋を送れる間に、世の不可思議を見ることや、たび／＼になりぬ。往ぬる安元三年

安元三年
即ち治承元年
(二卷)



鳴 長 明

四月二十八日かよ、風烈しく吹きて静かならざりし夜、戌の時ばかり、都の巽より火出で來りて乾に至る。終には朱雀門・大極殿大學寮・民部省まで移りて、一夜が間に塵灰となりにき。火元は樋口・富小路とかや、病人を宿せる假屋より出で來けりとなん。吹き迷ふ風にとかく移り行くほどに、扇を廣げたるが如く末廣になりぬ。遠き家は煙にむせび、近き邊はひたすら焔を地に吹きつけたり。空には灰を吹きたてたれば、火の光に映りて普く紅なる中に、風に堪へず吹き切られたる焔、飛ぶが如くにして一二町を越えつゝ、移り行く。その中の人現心あらんや。或は煙にむせ

びて斃れ伏し、或は焔にまぐれて忽ちに死しぬ。或はまた纒かに身一つ辛くして遁れたれども、資財を取り出づるに及ばず、七珍万寶さながら灰燼となりなき。その費いくそばくぞ。このたび公卿の家十六焼けたり、ましてその外は數を知らず。すべて都の中三分の一に及べりとぞ。男女死ぬるもの數千人、馬牛の類邊際を知らず。人の營み皆愚かなる中に、さしも危き京中の家を造るとて、寶を費し心を悩ますことは、勝れてあぢきなくぞ侍るべき。また治承四年卯月二十九日のころ、中御門京極のほどより大いなる辻風起りて、六條わたりまできびしく吹きけること侍りき。三四町をかけて吹きまくるに、その中に籠れる家ども、大きなるも小さきも、一つとして破れざるはなし。さながら平に倒れたるもあり、桁柱ばかり残れるもあり。また門の上を吹き放ちて四五町が外に置き、また垣を吹き拂ひて隣と一つになせり。況や家の内の

寶、數を盡して空にあがり、檜皮葺の類、冬の木の葉の風に乱るゝが如し。塵を煙の如くに吹き立てたれば、すべて目も見えず。夥しく鳴りどよむ音に、物いふ聲も聞えず。かの地獄の業風なりとも、かばかりはとぞ覺ゆる。家の損亡せるのみならず、これを取繕ふ間に、身を害ひてかたはづけるもの數を知らず。この風坤の方に移り行きて、多くの人の歎をなせり。辻風は常に吹くものなれど、かゝることやはある。たゞごとにあらず、さるべき物のさとしかなとぞ疑ひ侍りし。

二四 花月草紙抄

松平定信

一 なしと聞けば

なしと聞けばありといはまほしく、悪しきといふをば善きとことかへていはんこそ、いとねぢけたることなれ。櫻てふ花は我が國

松平定信
主、磐城國白河城
中、幕府の老
年、文政十二
年(西暦一八二
九)歿、十二
年七十二

のものなるを、唐國にもありとて、さまざま例など引きつくれど、櫻
書いたるもろこしの晝もなく、かなへりと思ふからうたもなけれ
ば、なしとこそいふべけれ。

いでや、櫻といはでしも、花とだにいへば、こと木には紛れぬものを、
ほのくくと明けゆく山際雲か雪かとはばかり咲き満ちたるも、霞こ
めたる夕まぐれ、花のけはひもおぼろに見えて、こゝにのみ暮れの
こす景色などいふは淺かりけり。まいてうてなのびやかなれ
ば近劣りするなどいふは、かのことかへてさえ負ふ心にいふこと
なりかし。風に散りかふも、雨に濡るゝも、遠山に見るも、軒端に向
ふも、曙も、夕暮も、露のひるまも、めかる時しなきも、殊に我が國ぶり
の姿にて、枝もすなほに、花のかたちもゆたけく、匂さへこちたから
ぬも、あやしきまでにこそ覺ゆるものなれ。

さるを、いづくにもありといふは更なり、曙、夕暮などと、面白からん

やうに言葉添ふるは、未だ深くそめし心にはあらざりけり。すべ
て言葉もていひつくさんと思ふは、いと淺き心かな。

二 かの入

かの人は雪螢あつめし窓に年をつみて、ふみ見る道に心をつくし
侍るなり。されば世の中のことにはいとく侍りといへば、さ
るこそまことの道まねぶ人なりけれとほめものするものありと
や。もとより道まねぶものは、五つの常^{*}五つの道よりして、人をを
さめ己ををさむる道まねぶより外ことはなし。されば世のこと
にさとく、今のあたりのみかは、千年の先つ世のこと、見ぬもろこし
の昔今のさまより、さかり衰ふるきざし、人のこゝろの上より、仕ふ
る道のくさぐさに至るまで、明かなること道まねぶ人とはいふべ
けれ。この世のことにおろそかにては、いかで道まねぶ人とはい
ふべからん。

五つの常
仁義禮智信
五つの道
君臣・父子・夫
婦・兄弟・朋友
の道。

三 わが誠より

わが誠よりつらぬき出づれば、見ざることも見え、聞かざることも聞ゆめりといふは、いと至りしことにて、それをばかのくしの君も、^{*}六十にして耳順ふ。ともものたまへりしぞかし。さるに、いさゝかもほりする心あれば、誠をおほふにぞ、その境にいたることなき。弓射る道を得て、そのたへなる奥意得しものは、弓には誠のはしをも得べし。弓に得きとて、それをもて馬に乗るべしと思ふべけんや。皆道知らぬより、たやすからぬことをたやすきやうにいふか。

四 傍よりいふことは

傍よりいふことは、いとよくあたるものなり。「かの人は衰へたまひき」といへど、鏡見てもさは思はず。「かれは今かくすれど、後には悔い思ふべし」などいへど、知らざるものぞかし。私の心だになくば、傍にて見ると同じかるべし。

くし
孔子のこと。
六十云々
吾十有五而志于學、三十而立、四十而不惑、五十而知天命、六十而耳順、七十而從心所欲、不踰矩。
(論語)

五 四つの時

四つの時のうつり行く景色こそ、またなくをかしきを、咲かざるをりの花を咲かせんとし、散るころに散らさじと思ふは、いとくるし。散ればまたこん年は咲きぬべし。いかに心をくるしむとも、霜白く氷堅きをりに、はちすの咲くべきことわりなし。されど咲くを待ち散るを惜しむは道なり。散るをもよそにして心とせぬは、道しらぬ心なるべし。

六 道路は

「道路は足底のひろさだにあらば歩むべし」といふは、例のことわりのみなり、いかで歩むべからん。梁の上を歩まば落ちぬべし。こはかの顔氏のいひたる、餘地なきなり。あまりにことに甚しく物にせちなれば、行はれぬのみか、うとまれぬべし。こは事物に對して餘地なきなりと聞きぬ。

顔氏云々
人足所履、不
過數寸、然
而咫尺之途、
必顛蹶於崖、
岸、拱抱之梁、
每沈溺於川、
谷者何哉、爲
其傍無餘地、
故也。
(顔氏家訓)

七 やんどとなき人

やんどとなき人にはかにいたづきにかゝれり。たやすからぬさまなりければ、今このくすし一人に任せんもいかゞなり、かれもくすしの道にはよのつねならねば、これと心を合せて薬調ぜよ。といへば、はじめのくすしかうべを振りて、さらばそのよのつねならぬものに任せ給へ。かゝるとみのいたづきを療治せん、人をかたらひてはいかでい來べき。といひければ、げにもとて、はじめのに任せてければ、そのいたづきも速におこたりぬ。

八 わが悪しきをば

わが悪しきをば桀紂^{*}をひきてなだめ、人の善きをば堯舜を引出でとがむ。かれはかゝる悪しきことなしぬ。といへば、げにさあらん。といふ。「このものかく善きことし侍りぬ。といへば、いかゞあらん、いぶかし。といふ。げにも人は悪しき心あるものかな。といへば、

桀紂
夏の桀王と殷の紂王

「善き名得まほしと思ふがゆゑに、人の悪しきにてわが心をなだめ、人の善きをば嫉むより出でくるなり。」といひき。

二五 雨後の月

千家元麿

数日來つた多量の雨が

今こそ晴れた

湿润と陰柔さはやが晴れきれるのが

あはれも雲がうら

さやうに渡れる月の光の美しさ

飲ぶ惠まれて息もついでに眺め入る

おく精力努力のシンボルのやうな

新鮮で着る——雨後の半月

千家元麿
東京市の人
明治二十一年
生、文學者

シンボル
Symbol

星の光く下にあり
 なんとよふ慕もよよ月と白星だ
 二つもその大を争もどに瞳み今か
 なんとよふ新し刺戟た
 あの陰柔よよのく後ふ
 よん不鞏かなものつあつたのか
 艶冷て若々しく壯健よ月
 何物とよの新鮮よ美よを逃ひつるふ
 自分を精力よ満たるれ歡喜に興奮して
 生む養る草木の間に小床のやよ歩む
 暗い藪の側を通ると

コーラス
Chorus.

擬古文

何千とよく群れてるの戀虫の
 入り交つたコーラスに驚かされた
 およそのさきよんな叫喚
 今宵の月のたをよ歌ふらよ
 夢中に興奮した野性の音楽
 若々しく月は
 見てるものが恥しいほど
 美しく艶である

二六 み山のしづく その一 小池道子

二六 み山のしづく その一

三三

小池道子
水戸市の人、
歌人、元宮内
省御用掛

いかなればかゝる御事にならせ給ひけん、今なほ夢の心地してくれ惑へるを、まして遙かにうかゞひ奉りて、驚き悲しみ叫びけん國民の心はいかばかりぞ。

神とのみ仰ぎまつりしすめらぎの

御代万代とたのみしものを

大みはふりの日より一月に當れる十三日に、大后の宮出で立たせ給ひて、伏見桃山の御陵御拜あらせ候はんと定めさせ給ひぬ。十二日には、上^{*}后^{*}の宮わたらせたまひて、御しめやかに御物語聞えかはさせ給ふ。東宮^{*}淳宮^{*}光宮^{*}も参り給ふ。御道のほどなど、なにくれと御心添へさせ給ひつゝ、みなよく心して仕へたてまつれ。など、仰言あり。

十三日、空うらゝかに晴れて、小春日和とやいはん、風なくして暖かなり。旅の装整ひたれば、まづ御眞影の御前に額づきぬ。かゝる

十三日
大正元年十月
大后の宮
昭憲皇太后
上后
天皇后下、皇
后陛下
東宮
裕仁親王
淳宮
雅仁親王、秩
父宮と申す
光宮
宣仁親王、高
松宮と申す

悲しき御旅に出でさせ給はんとは思はざりしをと思ふにも、涙止らず。大宮の御旅に出でさせ給ふ度毎に、御門出を祝はせ給ひて、御調度など大御心盡しのものども、御手づから参らせ給ひしことなど、すゞろに思ひ出づ。黒き御衣に御喪のしるし深くつきたる

誄
人またまをりて、ふしとせし
こゝろを、あはれまじくも、もよほ

小池道子筆蹟

誠
人はたじまこ
とあるこそ、尊
とけれみには
くらゐの有も
あらずも
道子

を奉り、打沈ませ給へる御氣色、仰ぎ奉るも更に悲し。泰宮^{*}参り給へり。御門より新橋^{*}までの御道筋には、すきまなく軍人の立ち並びたる後に、數万の國民、謹みて拜み奉れるにつけても、御惱重らせ給ひける日より、二重橋の外に列りて、熱き誠を籠めつゝ、御平癒を祈り奉れりと聞し召しつる折のことを思し出づらん。老若男女

泰宮
聰子内親王、
明治天皇第九
皇女、東久邇
宮、裕彦王殿下
新橋
東京市芝區、
當時東海道鐵
道の起點は新
橋驛であつ
た。

幼兒に至るまで、涙を呑みて立てる姿、いと悲し。
新橋には、上の御使として東園侍從東侍從名は基愛。參り給へり。後の宮御送りに
わたらせ給ふ。皇族をはじめ奉り、百官列を正して奉送するもの
數を知らず。空はうらゝかなれど、野山の景色物寂しう身にしみ
たり。

心なき草木を見てもこの秋は

なみだの種とならぬものなし

御道すがらの驛々に奉送する數万の人のおもゝちも、皆同じさま
なり。谷川の流清き方に目とゞまる。

高嶺より下りてもなほ谷川の

にぎりなき世に住むよしもがな

いづこなりけん富士の嶺うすく顯れたり。

薄墨の衣うちかづきふじのねも

むかへまつるか今日のいでまし

静岡に着かせ給へば、人垣築きたらんがごとし。この御用邸に、去
年の秋まで、大演習御統監の行幸のたびごとに宿らせ給ひしこと
ども思し出でて打沈ませ給ふ御氣色、畏かれどことわりとうかゞ
はれたり。

十四日、天氣よし。九時二十分御發車なり。富士の嶺もうすけれ
どよく見ゆ。常になつかしかりつる東海道の海山の景色を見る
につけても、

行くところ悲しかりけり御柩を

おくりまつりし道ぞとおもへば

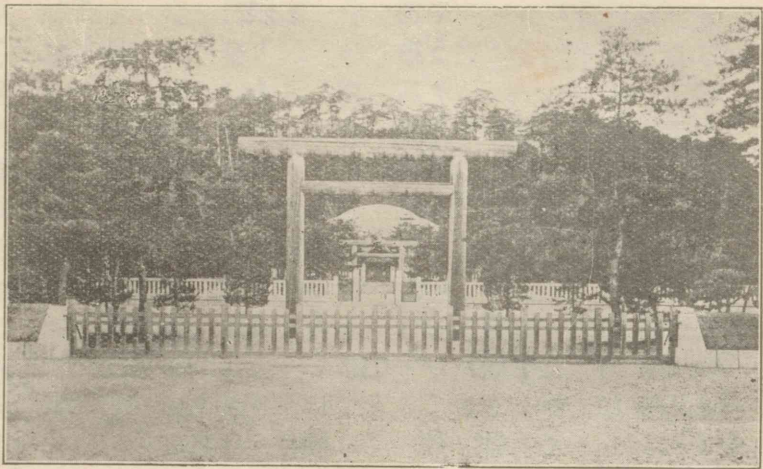
名古屋に着かせ給へば、梨本宮御息所梨本宮御守正王御息所伊都子。とともに出で迎へさせ給へ
り。軍隊の駐れる御道筋、いづこも軍人の整列せざる方なきに、ま
してこゝは夥し。奉迎の人も静岡のごとし。この離宮は名だた

る城址なれば、三百年の昔おぼゆるつくりざまなり。

二七 み山のしづくその二

十五日、空は晴れたれど、今日ぞ悲しき日なりける。七時の御發車なり。七條の停車場には、賀陽宮の御息所参り給ひ、奉迎の人殊に多し。十一時に桃山の假停車場に着かせ給へば、久邇宮御息所とともに出で迎へさせ給へり。華族高官の人々、平松好子君を始め、舊女官達も女孺も、諸寺の尼君も参り給へり。これより御陵道に進ませ給ふ。大宮の御心いかにおはしますらんと推し量り奉られて、様々思ひ出づること多きに、今まで包みおほせたりし涙溢れ初めて、止めん方なく、誰も／＼うつむきぬ。上り／＼て、御陵前に進ませ給ひて、御拜あり。皆御陵にぬかづきて拜み奉るも、なほ夢の心地す。御須屋まで上らせ給ひ、いとねもごろに拜せさせ給ふ。

七條停車場
京都停車場
御息所
故邦憲王の妃
好子
久邇宮
邦彦王
御息所
平松好子
子爵平松時陽
の伯母



伏見桃山東陵

皆額づき伏して、捧げ奉るものは
たゞ涙なり。

大御歌うかゞふ

こともなかりけり

たまの御こゑは

耳にのこれど

頭もたげんとしてはまた打伏しぬ。畏かれど御須屋近うまうのぼりて、幾度となく拜み奉り、まかでんとする折しも、こほろぎのいつゐたるを見る。

なれひとり御前に

ありてこほろぎの

かなしき音をや聞えあぐらん

また、

天つ日の高き恵はあらがねの

つちに入るとも忘るべしやは

限りあればまかでんとす。

こゝろのみあとに残して御陵の

山をくだるが悲しかりけり

やうく涙おしのごひて拜殿の前よりまた伏し拜む。

わたらひの宮居を仰ぐ心地して

たかくたふとし君のみさゝぎ

かうぐしさ譬へん方なし。

天の下知ろしめしつる天皇も

つひのおましはこの御山のみ

わたらひの宮居
三重縣伊勢郡
にある伊勢大
廟のこと、今
は宇治山田市
となつた。

もとの停車場にて、晝のおもの奉る。ふと見れば、高畠千畝君見えたり。まづ悲みの詞を交すも涙なり。高崎師翁の上も言ひ出でたり。

限りなきこの悲みを知らぬまに

失せにし君ぞうらやまれける

御車は動き出でたれど、なほ御陵の方のみ打仰がせ給ふ。四十餘年の御在位の間、御政事にのみ大御心を留めさせ給ひ、假初の御物語の折にも、國民の上のみ常に仰言ありて、大國の君と仰がれ給ふ御身ながら、功は諸臣に授け給ひて、何一つ慰みとせさせ給ふことなく、民の樂みを樂みとせさせ給ひて、をしく氣高くまし、つる御行は誠に万世の君主の鑑とこそ称へ奉るべけれ。日月の如く並び立たせ給ひて、坤徳を積ませ給へる大宮の御ふるまひ、はた自ら世に漏りて、山の奥、島の果なる國民も一つ心に慕ひ奉れるは、

高畠千畝
京都の歌人。
高崎師翁
名は正風。

比なき皇國の譽なるべし。

六時過ぐるほど、名古屋に着かせ給ひぬ。舞子にまします有栖川ありがは宮より、花房武官を御使にて、御氣色伺はしめ給ひ、御苑にて作らせ給へる洋花を奉らせ給ふ。花瓶は御自ら繪を書かせ給ひて焼かせ給ひたるなり。大宮いたく愛でさせ給ひて、御傍に据ゑさせ給ひ、都までもてまわれ。と仰言あり。

十六日、出で立たせ給はんとする頃より、こさめ降り出でたり。人の立ち満ちたる道の埃も鎮まりぬ。程なく止みて、濱松わたりになりぬれば、富士はいかにといふばかりに晴れ渡りぬ。いづくもいづくも豊かに實りたる田面の景色いと心地よし。

御心もしばし慰みたまふらん

あきの足穂をみそなはしつゝ

御車の過ぐる處に立ちながら

うしろむけるは案山子なりけり

二時十分静岡に着かせ給へり。御參拜も事なく濟ませ給ひつれば、御心もおちゐさせ給ひけん、いさゝか御物語などせさせ給ひて御氣色麗しきに、さぶらふ人々も少し眉を開きぬ。近き年より寒さに堪へさせ給はねば、御道の程いかならんと、上も后の宮も御心もとながらせ給ひ、人々も思ひわづらひ奉りつるを、出で立たせ給へる日より、暑きまで暖かなるは天佑とやいふべからん。十七日、天氣よし。いさゝか風のあればにや、高樓より見れば、富士の嶺晴れ渡れり。十時二十分の御發車なり。野も山も心地よく晴れたれど、なほ曇れるものは人々の心なり。興津の濱の波荒くして、なかくに景色を添へたり。富士は珍しきまで残りなく晴れ渡りぬ。

富士が嶺にかけてぞ仰ぐ大御國

有栖川宮
威仁親王。
花房武官
子爵花房太
郎。

ひろめたまひし君が御稜威を

拜觀の人々は到る處かはることなし。幼き學生の列れる様殊に
らうたし。「そこばくの赤子をもたせ給へれば、御心ゆたかに千年
を保たせ給へ。」など慰め聞え奉れば、例の「と打笑ませ給ふ。三時五
十分、新橋に着かせ給ひぬ。勅使は河鱒侍かほ従なり。後の宮出で迎
へさせ給ひ、皇族を始め、迎へ奉り給へること御送の時の如し。
道子老いくづをれたる上に、この度の悲みに頭をうたれたらん心
地して、御伴つかう奉らんことなど思ひもよらざりしを、大宮のい
とも辱き仰言にて、御後にさぶらひて近く御陵を拜し奉りしは、上
なき身のめいぼくになん。

二八 川柳點

金子 元 臣

川柳點は實に剃刀の如きか、觸るゝもの皆斷れ、近づくもの皆傷く。

河鱒侍従
子爵河鱒公
篤

金子元臣
東京市の人、
明治元年生、
國學者、宮内
省御歌所寄
人。

語句簡勁にして直ちに人の肺腑に入り、諷刺骨に徹り、滑稽頤を解
き、或は痛快に、或は輕妙に、或は突梯に、或は奇怪に、千變万化、人をし
て應接に違あらざらしむ。時に輕薄鄙俚なる調なきにしもあら
ねど、要するに、寸にして珍なるものなり。いで、左にその二三を舉
げて言ひ試みん。

あがるなといはぬばかりの帳を出し

無筆者年賀に來て、御慶帳の記名に困り、さらば來ぬ分にして下さ
れ。といひしこと、昔の笑話に見えたり。今は帳の代りに名刺受を
立關に出す。これもあがるなといはぬばかりなり。

竹の子は盗まれてから番がつき

よくあることなり。後の祭にもあれ、何にもあれ、番を附くるは附
けざるに勝れり。聞きやうによりては、諷刺ともなり、訓誡ともな
るなり。

おさへれば薄はなせばきりくす
形容の妙を曲盡せり。蘇東坡が「餓蛟取渴虎」と書きしを、いみじき
手がらのやうに驚ける人、若しこの句を見れば何とかいはん。

本降りになつて出で行く雨やどり

道灌の「いそがずば濡れざらましを」の歌と一對の巧語。急ぎても
わろし、急がでもわろし、とにかく考へものなり。

提燈が消えて座頭に手を引かれ

その矛盾がをかききなり。塙はまは檢校が、さて、さて、目あきは不自由な。
といひしに似たり。

片假名に四角な文字は手を引かれ

漢文に捨假名反點の左右にうるさく付き纏へるさま、譬へ得て妙。
昔のヲコト點ならんには、四角な文字に灸をすゑ。ともいはばいふ
べし。

蘇東坡
名は賦、宋の
文豪。(1036-
1101)

道灌

太田持資、足
利時代の武
將、文明十八
年(1555)歿、
年五十五。

急がずば濡れ
ざらましを旅
人のあとより
晴る、野路の
村雨。

塙檢校
名は保己一、
武藏國の人、
盲人、學者、
文政四年(1821)
歿、年七
十六。



柳川井柄*

手紙には狸台には鯉を載せ
手紙を見て肝を潰し、台を見て胸撫でおろすらんをかきさよ。近
來は、中等教育を終へたるものの文章にも、狐を馬に乗せたる類の
こと多し。あながちにこの狸をのみ笑ひがたくや。

名物を食ふが無筆の旅日記

腹のふくる、日記かな。食ふより外に
能なき人間を罵倒し得て痛快。

泣くくもよい方を取る形見分け

人情の弱點を穿ち過ぎて、あまりに酷な
る心地す。しかし、事實なるをいかにせ

ん。かの赤穂の城渡しの際、お金配分に高割を唱へし小野九太夫
はこの露骨なるものか。

かくの如く、川柳點は尋常茶飯の出來事を捉へて、よく滑稽化する

小野九太夫
假名手本忠臣
藏に出入る人、
本名大野九郎
兵衛。

柄井川柳
名は正通、江
戸の人、寛川
の始祖、寛政
二年(1720)歿、
年七十三。

のみならず、また最も眞面目なるべき故事・傳説・史實等を題目として、その縦横自在なる口吻を弄せり。

戸隠も神樂のあひだ髭をぬき

岩戸の細目に開くまでは、用のなき戸隠明神なるを思ふべし、鑷に髭ぬくひま人の所作を、神代に附會したる、働あり。

御紀行拜見に能因のういんは當惑し

なまじひに名歌を詠みて苦勞をまうけたるは能因なり。天日に焦して顔だけは黒めたれど、紀行までは手が届かずやありけん、物にその沙汰なし。作者のつけ目はこゝなり。たゞし、袋草紙ふくすしに、一度においては實か、八十島の記を書けり」とあり。いつも室内旅行家にはあらざりけらし。

忠盛ただしげの高名の場を犬がなめ

抱きとめたるは油坊主なるを思ふべし。わざと聯想の一階を飛

戸隠 信濃國戸隠山、手力雄神を祀る。

能因 鎌倉時代の歌僧。

袋草紙 四卷、藤原清輔の著、歌學の書。

忠盛 平清盛の父、仁平三年(一一八三)歿、年五十八。

び越して、高名の場を嘗めたりといへる滑稽突梯、まことに及び易からず。

その暗さ隼はや太櫻たに衝きあたり

盛衰記の頼政より鶴を射る條に、黒雲とは見たれども、天は實に暗し、いづこを射るべしと、矢所定かならず」とあり。乃ち郎等隼太が左近の櫻に鼻衝きあててまごゝする一場の喜劇を案出し來れるなり。作者はいかなるへうきんものぞ。

時致ときぢは鞭をかじつて息をつぎ

兄祐成よりが急を救はんとて、遂に百姓の馱馬を奪ひて大磯おほいそに驅けつくるは、曾我の物語中出色の快譚なり。これを圖にして大根の鞭を添へたるは、畫工の氣轉なり。せきにせいたる息やすめに、その大根を嚙らせたるはこの作者の氣轉なり。

佐野さのの馬戸塚うまづかの坂で二度ころび

隼太 頼政の郎等猪隼太。

盛衰記 源平盛衰記。頼政源氏、治承四年(一一八三)歿、年七十七。

時致 曾我五郎祐成曾我十郎大磯相模國。

佐野 源左衛門常世、諸曲録の木にある。戸塚の坂相模國。

戸塚の坂は鎌倉入の一難處。元來乗力なき源左が瘦馬、さぞや越えなづみしならん。さるを、二度まで轉びたりと誇張したるに大いなる可笑味を生ず。

芭蕉は飛びこみ道風は飛びあがり

湊合の妙を見る。主題の蛙をいはで、突然に仕立てたるところに一種の面白味あるなり。

釣れますかなど文王そばに寄り

流石の聖人文王と奇傑太公望との邂逅も、話の口火を切るには極めて平凡ならざるを得ず。たゞ「など」の語、胸に一物ある趣を状し來りて、幾多の波瀾あるを覺ゆ。

二九 落首と落書

本宮泰彦

我が國には古から珍しいこと可笑しいことがある毎に、談諧な落

芭蕉云々
松尾芭蕉の句
に、古池や蛙
飛びこむ水の
音。

道風云々

小野氏、平安朝の書家。

文王

周の武王の父。

太公望

呂尚といふ、文王・武王を輔けて天下を一統させた。

本宮泰彦

山形高等學校教授。

首落書をして、世を諷刺し自ら楽しんだものが少くなかつた。殊に京童は口さががないといはれるほどあつて、既に平安朝の頃から、落書して大内の壁に貼るのもあり、落首を詠じて賀茂川原に落すのもあつて、寺の門、院の柱、落首落書に汚れないのはなかつた。それらの中には、史籍に書き留められ、後の世の人をして思はず案を拍ち願を解かせるものも少くない。平治の乱に、源義朝は鎌田兵衛政家を隨へて京都を遁れ、政家の舅、尾張國の住人長田四郎忠致父子の許に身を隠したが、忠致は不次の賞にあづからうと思つて異心を挟み、義朝主従を騙討にして、首級を携へて上洛し、清盛の見參に入れた。義朝の首級はかうして獄門の樗木にかけられたが、その時、次のやうな落首を書きつけたものがある。

下野はきのかみにこそなりにけれ

鎌田政家
本名正清、相模國の人。

よしとも見えぬあげづかさかな
義朝は嘗て下野守であつたからである。きのかみは紀伊守と木の上とをかけたものであつて、あげづかさは上司で、官職昇進の義である。

忠致はその功によつて壹岐守に任ぜられたが、彼が相傳の主と正しい婿とを殺して、過分の恩賞にあづからうとしたさもしい心根を悪むものが多く、やがて誅されるべき風聞があつたので、忠致父子は色を失ひ、急ぎ美濃を経て尾張へ逃げ下つたが、その朝、彼の宿所に落首したものがあつた。

落ち行けば命ばかりはいきの守

みのをはりこそ聞かまほしけれ

治承四年、源頼朝が東國に起つた時、討手の總大將として遣はされたこんのすけ權亮少將平維盛は、富士川の西岸に陣したが、一夜水禽の音に驚

平維盛
重盛の長男。

かされて、一戦も交へないで京都に逃げ歸つた。この時、清盛の邸の門に落書したものがあつた。奈良法師の詠んだものだといはれてゐる。

富士川の瀬々の岩越す水よりも

早くも落つる伊勢平氏かな

源氏の軍勢が富士川に押寄せた時には敵一人もなく、川の畔に物の具が多く捨ててある中に、「忠清」と銘を書いた鎧唐櫃が一つあつた。忠清とは平家の侍大將上總介忠清のことである。そこで、また落首をしたものがある。

富士川に鎧を捨てつ墨染の

衣たゞきよ後の世のため

忠清は上總介であつたから、上總國から産する馬の鞆にことよせて、

忠清はにげの馬にや乗りつらん

かけぬに落つる上總鞆

にげは逃げと二毛とにかけたもので、二毛とは白と黒との交つた
葦毛をいふのである。

*元和元年、豊臣氏の滅亡した時に、次の落首があつた。

鐘の銘韓長老の諸行ぞや

無常となりて大阪滅亡

諸行は所業にかけたのである。韓長老は方廣寺の「國家安康」の鐘
銘を書いた清韓和尚のことである。

*慶安四年、徳川家光將軍の薨去した時、幕府の老中たる堀田正盛阿
部重次の兩人がこれに殉死したが、松平伊豆守信綱だけは生き残
つてゐたから、これを諷して次のやうな落首があつた。

伊豆まめは豆腐にしてはよけれども

元和 後水尾天皇の
年號(三三三—
三三四)
方廣寺 京都洛東、天
台宗
慶安 後光明天皇の
年號(三三六—
三三九)
堀田正盛 下總國佐倉城
主
阿部重次 武藏國岩槻城
主
松平信綱 武藏國川越の
城主、幕府の
老中、武藏國
川越城主、幕
府の老中

役にたゝぬはきらずなりけり

當時幕府の御坊主と称するものは、やゝ文事を解してゐたばかり
でなく、閑散な役目だつたから、よく落首落書などをしたといふこ
とである。

三〇 家庭と科學

三宅やす子

婦人に科學的思想の缺乏してゐるといふことは、近頃色々な人に
よつて叫ばれる。もつと家庭に科學的思想を取入れねば、到底家
庭生活の向上の望まれないことは、婦人の口を通してさへ唱道さ
れるやうになつた。

しかし、謂はゆる科學的思想とは果してどういふものかと反問し
て見ると、さうした問題が満足に今の多くの家庭を幸にするやう

三宅やす子
京都市の人、
明治二十三
年生、故理學
博士三宅恒方
の妻

になる日は、まだ程遠い氣がしないでもない。或家庭改善會の席上で演説した一名士の言葉に、要するに、日本婦人は家事を科學的に考へねばならない。一例を擧げると、台所のガスの使ひ方などにももつと頭腦を働かせて、強い火力を要する場合と弱い火力を要する場合との區別をして使ふとか、また、どの家庭にも計量器を備へつけておいて、商人の不正を許さないやうにせねばならない。少くともガスや電氣のメートルMeterの見方ぐらゐは主婦が心得てゐなければならぬ」と、これが論旨の凡べてであつたのには驚かされた。勿論この名士は科學者ではないが、しかし、その絶叫する謂はゆる家庭に必要な科學的思想が、かうした淺薄な程度に止つてゐるのは、いかにも物足りなく感じられた。

非科學的態度は私達の家庭の到る處に充滿してゐる。何故にこれがかうなつたか」といふ根本に考へ及ぶことなしに、因襲通りに

家事をそつと片付けて、今日は昨日より、明日は今日より、塵一つほどの進歩もしないのを少しも怪しまないで、反復生活をしてゐる家庭婦人を本當に覺醒させるものは、眞實の意味に於ける科學的思想である。無意味に物を解剖することや、一々顯微鏡で物を調べることが必ずしも科學的ではない。ましてガスや電氣のメートルを見ることや計量器の使ひ方などは、正に女中に教へておくべき程度の事柄である。

家庭の進歩向上は主婦が頭腦を働かせることによつて得られる、一度味つた不便をいかにして除かうかと努力することによつて始る。秩序立つた頭腦で正確に家事を處理すること、これが根本の急務である。科學的知識普及の必要が識者の口に上つて、その通俗雜誌さへ發行されるやうになつたのは、確かに大きな進歩ではあるが、今の家庭婦人の多くは、これらの通俗雜誌を讀む靜かな

時間さへ與へられてゐない。私達の生活をもつと本當に改善して、無理に修養するのではなく、眞に興味に引き入れられて讀書するやうな靜かな時間を得るやうにすることは、また最も望ましいことである。しかし、何故にかうなつたか。かうすればどうなるか。などと、物事の正しく細かい觀察と研究、これが家庭を科學的に明るくするもので、これがなかつたならば、いかに科學書を讀んでも、計量器を備へつけても、いつまでも非科學的生活を繰返さねばならないだらう。

自修文

一 女性の崇高美

總べて人の美しさは、その魂が本當に純になりきつて淨化された時に出るやうに思はれます。けれども、女性美といふと、我々はとかく外面的の美しさをもその時の考につい加へたくなる傾向を有つてゐます。昔からの物語や劇や繪畫などにしまして、それに出て來る孝行娘や貞女や節婦などは、いづれも美人に描かれてあります。また實際美人であることを望みたいやうな氣もします。けれども、本當の女性美は必ずしも美人に於てだけ見出されるものではないでせう。いくら美人でも、その心に卑しい點があれば、その卑しさは必ず體のどこかに表れます。また醜い女でも、その心が氣高ければ、その氣高さは必ず顔にも體にも表れて、犯しがたい崇高美を示

三 島 章 道

三島章道、子爵、東京市の人、明治三十二年生、文學者。

します。名優團十郎の晩年はなんといつても老人だし、それにそんなに美しい顔でもないのて、若い美人などに扮すると、初は一寸美人だといふ感じは起りませんけれども、藝を見てゐる中に、それが次第に美しくなつて、遂には本當に美人と見えるやうになりました。これなどは、偉大な藝術の力で美化して了ふからでせう。これと同様に、醜い女でも本當に美しい心を有つてゐれば、事實どことなく氣高く美しく見えるものです。それゆゑ、昔の孝行娘や貞女や節婦が美人であつたといふのは、美人だと強ひて言つてゐるのではなく、それは本當に美しく見えただから言つたのでせう。
Jeanne d'Arc
また彼女が女性であるが故に、女性としての美しさがそこに表れて輝いてゐるやうに思はれます。そして特に彼女が火炙りの刑に處せられたその瞬間には、どんなにその顔が崇高美に輝いたかを想像することが出来ます。本當に純な淨化された心で、愛なり主義なりのために命がけになつて、我と我が心をしかと握り締めた時ほど、その人の美しさの表れることはないで

名優 團十郎 市川氏、九代目、本名堀越秀、明治三十六年、年六十六、扮すよそほふ

ジャンダーク フランスの女丈夫。(Jeanne d'Arc) 刑しおき。

せう。それは結局その魂の緊張し人格の反映する崇高美です。

二 母の歌へる

茅野雅子

をさなごは眠れり
かたげつゝ片ゑくぼせり
本の實色なる頬と
うちまもる母のこゝろに
そを聞きて母はふと思ふ
さくら貝眞珠のたぐひ
その海の薫こそ
譬ふればをさなごよ

まろらかに白き手を
その指は花瓣の如く可愛し
ふりかゝる柔かき髪の匂を
かすかにも響く汝が呼吸
うらわかき大海を
むらがりて優に遊べる
今汝が薔薇の唇より漏るれ
汝は人の世に香を吐く香爐

結局 つまり。緊張 ひきしまる。反映 てりかへし。
茅野雅子 茅野雅子(儀 太郎)の妻、もと増田氏、大阪市の人、明治十三年、生、歌人。

あはれこのめでたき
生みたるは誰ぞあゝ

天地のたふときうつは
さいはひある母我にこそあれ

三 一筋の心

八波 則吉

加賀千代の句に、

百生や蔓一筋の心より

といふのがあります。三界唯一心の意を詠んだもので、あらゆる世界の物

百なりやつる一筋の心より

千代筆蹟

象は、一として我等の心性から起らないものはない所謂地獄極樂もたゞ我が心一つにあるものだとの意味を巧みに十七言の中に収めた名吟であります。

名吟

百なりやつる一筋の心より
ちよ

八波則吉
福岡縣の人、
明治九年生、
第五高等學校
教授。
加賀千代
女流俳人、安
永四年(西曆)
歿、年七十四。

ます。

夏目さんの「カーライル博物館」と題する短篇にもある通り、カーライルは名高い癩癩家^{Carlyle}で彼の身邊を圍繞して無遠慮に起る都會の響を無心に聞き流して著作に耽る餘裕がなく、二千金を投じて、天に最も近く、人に最も遠ざかつた「書齋を、四階の天井裏に増築したさうです。

「……出来上り候上は、たとひ天下の雞ども一時に鬨の聲を揚げ候とも、閉口仕らざるつもりに御座候。とは、彼が夫人に與へた書翰の一節です。さて、書齋はまづ／＼思ひ通りに落成しました。なるほど、ピアノの聲、犬の聲、雞の聲、鸚鵡の聲、その他一切の聲々——それは彼が下層にゐた時に惱まされた——は豫期したやうに聞えなかつた。しかし、これと同時に、彼は曾て思ひも寄らなかつた障害に出逢つたのです。即ち寺の鐘、汽車の笛、さてはなんともしれず遠くから來る下界の聲が、呪の如く彼を追ひかけて、舊の如くに彼の鋭敏な神經を苦しめたのださうです。

こゝもまた浮世なりけりよそながら思ひしまゝの山里もがな

夏目

名は余之助、
号は漱石、文
學者、大正五
年歿、年五十
カーライル
英國の文學
者 (Carlyle's
Study)

癩癩家
かんしゃくも
ち。

圍繞
かこみめぐ
る。

書翰
落てがみ。

落成
出来上る。

豫期
前以てあてに
する。

障害
さしはり。

こゝもまた
兼好法師、新
千載集。

かくてチエルシーの哲人カーライルは、我が雙が岡の兼好法師と同じ憾を
抱いたわけです。

世を捨てて山に入る人山にてもなほ憂き時はいづち行くらん
青い眼鏡を掛けてゐれば、何を見ても青く見えます。

來て見れば森には森の暑さかな

千代尼

青く見えるのが厭なら、速に青い眼鏡を外すに限る。さもなくばどこまで
遁げていつても無益です。メーテルリンクの説に、幸福と悲哀とは、外部か
ら來るやうに思へる時でも、實は我等自らの中に存在するものである。我
等を取巻いてゐる一切のものは、我等の胸の如何に従つて、天使ともなり惡
魔ともなるものである。とあります。實例について申して見ませう。

虚榮心は婦人の通有性とはいへ、沙翁の描いたマクベス夫人ほど虚榮心に
富んだ婦人は少いでせう。同夫人の虚榮心は遂に忠臣マクベス將軍を驅
つて大逆罪を犯させるに至つたのです。「虚榮の妻は夫の首枷。」實に恐る
べきは婦人の虚榮心です。

チエルシー
ロンドンの
兼好法師
山城國、京都
の西
兼好法師
吉田氏、鎌倉
時代、文學
者、正平、五年
(1190)歿、年
六十九。

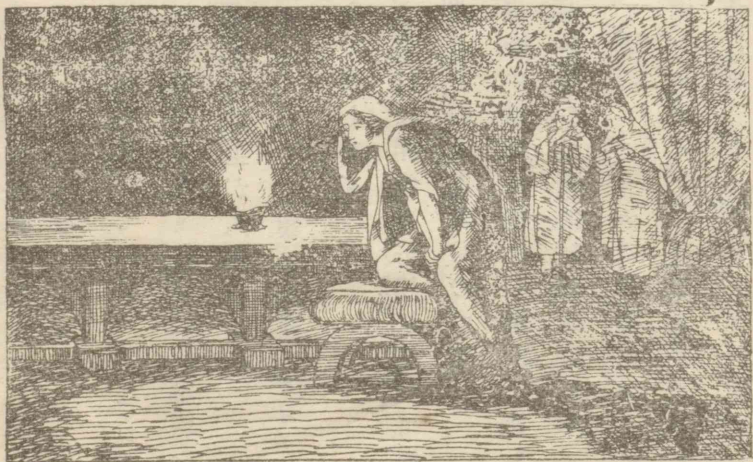
世を捨てて
凡河内射恒、
古今集
メーテルリン
ク
ベルギーの作
劇家。(1862)

沙翁
シエクスピア、
英國の詩人。
(1564-1616)
マクベス、
シエクスピア
の四大悲劇の
一「マクベス」
の女主人公。

さて、マクベス夫人は惡運強く、にか
く一旦は目的を達して、身は王妃の榮
位を贏ち得ました。しかし、その良心
の呵責を御覽なさい。――

マクベス夫人、え、この手はもうどう
しても綺麗にはならないのか知ら
ない。このところはいつまでも血の臭
がしてゐるわ。アラビヤに産する
だけの香料を皆持つて來ても、この
小さい手の臭を消すことが出來な
いのか知ら。おう、おう、おう。

醫師、お妃のあの溜息をお聞きなさ
い。お胸に大層な重荷を負つてい
らつしやるのですね。



マクベス夫人

呵責
せめること。

侍女「わたし體中にどんな榮譽を受けることでも、お妃様のやうな胸には
なりたくはございませんわ。」

醫師「なるほど。なるほど。昨今妙な流言が廣まつてゐる。常ならぬ行
は常ならぬ苦を生むものだ。毒を受けた靈は、ともすれば己が秘密を
の枕に訴へるものだ。お妃には醫者よりは坊主が入用らしい。」

(森鷗外譯「マクベス」)

マクベス夫人は狂ひ狂うて、遂に狂ひ死をいたします。

さてまた、心の持ち方如何によつて、他から見れば非常な苦境に立つてゐる
やうでも、その實は無上の幸福を感じてゐるものもあるものです。

昔、ローマの執政官サピナスといふ男が皇帝の逆鱗に觸れて、僅かに身を以
て別荘に遁れ、地下の洞穴に潛み、別荘に火を放つて焼死を粧ひました。事
實を知つてゐるのは忠僕たゞ一人だけで、妻のエポニナさへ暫しはこれを
知らなかつたのです。で、忠僕が夫の自害をエポニナに話ると、エポニナは
三日三晩地上に泣き伏して飲食を絶ちました。サピナスは妻の悲嘆を不

流言
無根の噂。

森鷗外
島根縣の人、
醫學博士、文
學博士、陸軍
軍醫總監、帝
室博物館總
長、帝國美術
院長、宮内省
圖書頭、大正
六十年歿、年
六十三。
苦境
苦しい境遇。
逆鱗
天子の立腹。

憫に思つて、自分の生きてゐることを知らせました。爾後エポニナは九箇

年間、晝は人中に出て前と同様夫の死を嘆いて瀧なす涙を灑ぎ、夜は人知れ
ず洞穴へ下りて、出來得る限り夫の無聊を慰めたのです。九箇年間——百

八箇月——三千二百八十五日の間陰鬱と暗黒との裡に住んでゐたのです。
その間の苦勞は察するに餘りがあります。

九年の後サピナスは到頭見つかつて、皇帝の前に引き出されました。その
時、エポニナは地の底で産み地の底で育て上げた二人の男の子を連れ出し、
皇帝に向つて、

「私はこの子を洞穴の中で自分の乳で育てました。いつか夫の赦免をお
願する時、一人でも人数が多いやうにと思ひまして……」

居合せた人々の眼からは涙が溢れ出しました。が、皇帝は斷乎として聽かな
かつた。エポニナは夫と同時に死ぬことを願ひ出しました。そして最後に、
「眞晝の日光を浴びてお出で遊ばしめても、また大帝國の光榮を荷うて
お出で遊ばしめても、恐らく陛下には御存じないやうな幸福を、私は暗

爾後
その後。

無聊
たいくつ。

赦免
ゆるし。

斷乎
きつぱり。

黒の中で感じてゐました。」
と言上しました。

メーテルリンクはこの物語に次の言葉を付け加へてゐます。

「エポニナの崇高な絶叫は、愛に胸を觸れさせたことのある人悉くの絶叫である、人生に興味或は希望を見出してゐる靈を有つてゐる人悉くの絶叫である。」（天谷繞石譯、智慧と運命に據る）

抑、善因に善果が伴ひ、惡因に惡果が伴ふのは、争ふことの出來ない千古の事實です。しかるに、時あつては善因に惡果が伴ひ、惡因に善果が伴ふやうに見えることがあります。マクベス夫人が一時榮華を極め、エポニナが始終不幸に陥つてゐたやうに見えたなどがそれです。しかしながら、天網恢恢、疎にして漏さず、最後の審判は秋霜烈日の如く嚴なものです。

坪野氏の「快馬一鞭」といふ書に、陰徳の價値を論じた一節があります。

「……お前は巡禮からお禮を聞いてゐるけれども、予は少しも聞いてゐない。お前はお禮を聞いただけで、お前の親切は幾分割引されてゐるけれど、」

ども、予は少しもお禮を聞かないから、予の好意は何等の割引もされない。」
婦人の善行は概ね陰徳の部に属します、内助の功と呼ばれる所以です。陰徳——内助——外に現れないだけ、その徳の價値は一層貴いと申さねばなりません。先年、萬朝報で募集した妻に對して、誠め示す金言の第一等は、良妻は銅像の礎を築く。といふのでした。願はくは隠れた偉人となつて、銅像の礎を築いて戴きたいものです。要するに、世の中は心の持ち方一つで、樂しくもまた苦しくも觀じられるものです。

「平地に車を挽く車夫は、山の手は難儀だといひ、山の手に車を挽くものは、平地は困るといふ。山の手には勾配があつて、登つてから休むつもりで登り、下る時は後押があるやうで早くて樂であるが、平地は勾配が同じだから、却つて挽きにくいといふ。して見ると、平地が困難であるのか、山の手が難儀なのか、つまり挽くものの根性によるではないか。」

（坪野平太郎著「快馬一鞭」）

エポニナの如きは實にこの車夫の心掛で、人生の山の手に車を挽いた婦人

絶叫
聲の限りに叫ぶこと。

大谷繞石
名は正信、松江市の人、明治八年生、第四高等學校教授。

天網恢恢
天道は嚴で、惡行には早晩必ず惡報のあつるのをいふ。
審判
さばき。
坪野氏
名は平太郎、前東京高等商業學校校長、陰徳。

人の目に見えぬところで行ふ徳。

萬朝報
東京市で發行する日刊新聞。

です。我等は自分で幸福だと知らねば、無上の幸福も我等にはなんの益をも與へぬものです。續千載集に、顯俊法印の和歌があります。

押しなべて心一つと知りぬれば浮世にめぐる道も惑はず
心一つ——一筋の心——いづれも意味は同様です。願はくは、この心一つを正しく持つて、愉快に幸福に一生を送らうではございませんか。

四 桐の葉

式子内親王

桐の葉も踏み分けがたくなり、にけり必ず人を待つとなけれど

小野小町

色見えて移ろふものは世の中の人このころの花にぞありける

紅梅内侍

勅なればいと畏し鶯の宿はと問はばいかゞ答へん

紫式部

わりなしや人こそ人といはずともみづから身をや思ひ捨つべき

赤染衛門

踏めば惜し踏までは行かん方もなしこゝろづくしの山櫻かな

和泉式部

諸共に苔の下には朽ちずしてうづもれぬ名を見るぞ悲しき

小式部内侍

いかにせん行くべき方もおもほえず親にささだつ道を知らねば

齋宮女御

琴の音に峰の松風かよふらしいづれの糸より調べそめけん

五 玄海灘から香港まで

吉江孤雁

荒れるべきはずの玄海灘も極めて平穩だつた。船尾から後へ曳いた長い波の痕が、後方の地平線まで續くの眺めても、船首へ湧き上る眞白な水の頭を見つめても、たゞ我々にこれから長い旅を思はせるだけで、それも一

種胸の躍る思を湧き立たせるだけだつた。際涯のない水の廣野の中に立つてゐると、人の思は却つて陸上へは向はないものと見える。この無限を思はせる天と水との両界の廣がりはその中へ人間の小さな情緒などは呑みこんでしまつて、感傷的な思などはこれを起す餘裕がないやうにしてしまひさうである。

しかし、陸地が見え出して來ると、また思はその方へ引かれがちである。海の水が黄濁の色を呈して來た中を、五六時間船が進んでいくと、水とすれすれな支那大陸の一端が仄かに眼前に浮んで來る。そして揚子江の航路から、船が黄浦江へ分れてはひつていく頃、兩岸の蘆原に水牛が頸を垂れて立つてゐるのが見え出して來ると、一種の情緒が胸に湧いて來る。陸上のもつてゐるのを見え出して來ると、一種の情緒が胸に湧いて來る。淡い旅情が胸裡を循る。

「世界市たる上海の印象は、私にとつては徒に煩雜なものだつたといふに過ぎない。まだこゝには特殊な文化が出來てゐず、皆持ち寄つた、いはば寄合

際涯
はてし、かぎり。

情緒
感情。
感傷
感じいたむ。

黄浦江
揚子江の支流、上海はこの江に沿うてある。
よすが
たより。

煩雜
うるさい。

生活である。組織はあらう、秩序もあらうが、落着いた空氣、即ち文明はまだ出來てゐない。だから、白楊の葉の風に鳴つてゐる郊外の部落を、夕日を浴びながら驢馬の車で走らせてゐる支那人の生活の方が遙かに興味が深かつた。

長く停つてゐない碇泊地の印象ぐらゐ當にならぬものはないかも知れない。「日本内地よりも、まだ上海の生活の方がよい。」といふ語を屢、耳にするが、それは、組織と秩序とを求める人の聲だらう。それには私も同意する。けれども、この「世界市」には、民族の争闘が最も露骨に示されてゐる、金力階級の觀念が最も明瞭に現されてゐる。共通の文化のない集合生活は、此等の現象を最もよく馴致するのかも知れない。ともかく、先を急ぐ旅客を載せた



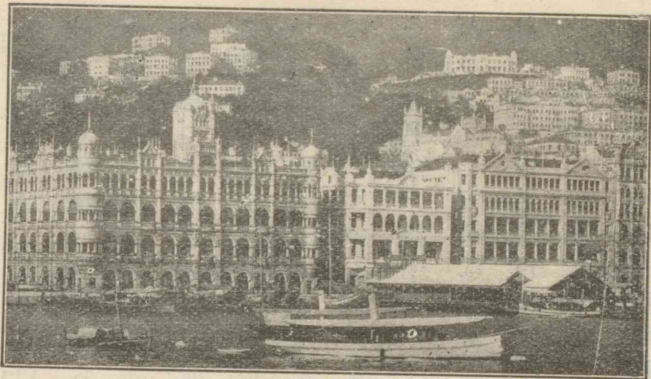
上海市街

白楊
はこやなぎ。

碇泊
いかりを卸してとまる。

露骨
むきだし。
馴致
次第に現在の事情に到達させること。

船は、一日おいてこの港を出發した。



臺灣海峡はさすがに荒れた。始めて航海してゐるやうな意識を興へられた。香港への入口では、いくつかの島の間を縫つて、明るい日の光の中を、手の届きさうな陸地とすれ／＼になつて船は進んでいつた。

とでもいひさうな唯一の支那漁村がある。その他は、平かな路と、到る處に

香港の夜景は世界の諸港にも稀な美しさだつた。地中海の港を例へば、ニースを海上から見たとて、香港の夜景の賑かさはない。蜂窩を無數に集めて、その細房の一つ／＼に光を點じたやうなもので、香港全島が一つの小さな天國に見える。背面の入江の静かな美しさ。しかし、そこにはまだ海賊の根據地だつた時代の面影

意識
覺えのある心
のさま。

ニース
フランスの
港地中海岸、
マルセイユの
東北東四十
哩。
蜂窩の集。
細房
小さい室。
背面
うしろ。

見られる居心地好ささうな住宅と繁茂した樹林と、海面に浮ぶ輕快なヨットとで美しい。そして、自動車は、その中腹を一巡する平坦な道路の上を、何に妨げられることもなく急速に走つていく。對岸の支那大陸の上には、白雲山が雲を漂はせて悠然として立つてゐる。香港はともかく全く出來上つた立派な植民地である。しかし、何故にこの美しい海港から優れた文藝が生れて出ないのだらう。海上に於ける英國民は詩人にはなれないのだらうか。そんなはずはない。英國はフランスなどよりも海洋の文學を豊富に有してゐる。けれども、これだけの、モナコの公國などよりは遙かに大きな纏まつた領土と潤澤な富との二つを持ちながら、何故にこの地に立派な詩人が一人も生れ出ないのだらう。それは、アメリカなどと同じく、この島の住民たる英國人が、恐らく苦しい自己批判を持つ機會がないためだらう、たゞ商業國民たる本能ばかりを發揮してゐるためだらう。

繁茂
しげる。
ヨット
輕快な小船。
ひとめぐり。
白雲山
廣東省。

モナコ
フランスの東
南にある公
國、世界最小
の獨立國、面
積約一方里、
十分の一、人
口約二万三
千。
潤澤
十分。
批判
批評判斷。
發揮
あらはす。

六 ウェストミンスターとパンテオン

河上肇

ロンドンのウェストミンスター寺院は偉人國葬院とも謂ふべきものである。バリのパンテオンも略これに似たもの。

ロンドンに最初いつた時は、僅か一週間滞在しただけであるが、その一週間の中に三度もいつたほど、ウェストミンスター寺院は私の氣に入つた。始めてウェストミンスターにいつた時、人々がいづれも帽子を手にしてゐるのを見て、西洋の禮儀を少しも心得ぬ私でありながら、すぐに寺院では帽子を脱ぐものだと氣づいた。それほど全體の空氣が落ちついてゐて、いかにも人の心を静める感じがした。さうして隅から隅まで、案内者なしに、自分一人で思ふがまゝに逍遙することの出来たのは、いかにも悦ばしかつた。無料では入れぬ處でも、一定の金さへ拂へば、いつでも、いつまでも、思ふがまゝに逍遙することが出来た。

經濟學者ではヘンリーフォアセットの半身像がこゝに在るはずであるの

フォアセット
英國の經濟學

逍遙
そゞろある

河上肇
山口縣の人、
明治十二年
生、經濟學者、
法學博士、京
都帝國大學教
授。

に、第一日目にはそれを見落してしまつた。二日目にはぜひ探し出したと思つたが、容易に見つからぬ。それもそのはずだ、往來止にしてある片隅の室の遙か奥の方に半身像が懸けてあるのだつた。しかし、遠くから薄暗い壁に懸けてある半身像をとまかくも認め得たぐらゐだから、悠々とこの寺院の内をさまよふことの出来ることも推して知るべきである。進化論で有名なあのダーウィンの葬つてあるその床石の上でも、私は様々のことを思ひ浮べながら、飽くまで佇むことが出来た。ダーウィンの半身像の懸つてゐるすぐ傍の壁には、エネルギー不滅の法則を考へ出したジュールのための記念板がある。



院寺ータスンミトスエウ

者。(1833—1882)

ダーウィン
英國の生物學
者。(1809—1882)

ジュール
英國の物理學
者。(1818—1892)

「この牌はジェームス、ブレスコット、ジュールを永遠に記念せんがために結合したる諸國の人々によりて、こゝにニュートン・ハーシェル及びダーウイン等の墳墓に近い處に置かる。」

といふ牌銘も、私はこれを手帳に書きとめることが出来た。幾度か私の論文や著書に引合に出した蒸氣機關の發明者ジェームス、ワットの石像もある。ガウンを着て、椅子に腰を掛け、左脚を後に引いて、右脚を前に出し、紙を膝の上に展べ、左手にその端を抑へ、右手にコンパスを握つてゐる。台石の表面を見ると、それには次のやうな意味の文字が彫りつけてある。

「この國の國王諸大臣並に貴族、平民の多くのものどもが、この記念像をジェームス、ワットのために建てた。これは彼の名を永遠に傳へようとしてではない。彼の名は平和の事業の榮えるかぎり、かゝる記念像を俟たないで永遠に傳はるべきものである。むしろこの像は、人間が彼等の最上の感謝に値するところの人々を尊敬することを知つてゐるといふ證據を示すために建てたものである。」

ニュートン
英國の數學者
物理學者。(1642—1727)
ハーシェル
英國の天文學者、物理學者。
(1731—1822)
牌銘
ふだのほりも
ワット
英國の機械學者、發明家。
(1736—1819)

思ふに、かの産業革命、延いて現代の物質的文明を人間化すれば、そこにジェームス、ワットの塑像が出来る。私は今親しくその偉大な塑像の前に立つて、彼の生涯を懐ひ、また産業革命の偉業を思つて、万感の徂徠するの涙を催しさうである。記念像の下に彫りつけてある幾行かの文字も、實にゆかしいものである。私は行を追うて丁寧とその文句を手帳に寫し取りながら、日本にも若しかゝる場所があるならば、私は子供等の教育のため、屢、そこへ連れていきたいものだと思つた。

その後、私はパリに移つて、バンテオンを見にいつた。こゝではその墳墓のある洞窟を見るのに、案内者に就かねばならぬ。時を定めて案内者が觀覽者を集める。その時それに隨いて入るのである。一人の案内者が何十人かの群を引連れ、薄暗い洞窟の中を、出來得るだけ急ぎながら、たゞ時折立止つて若干の説明をするだけなので、一分間たりとも落着いて、英雄の墳墓を仰ぎ、追慕の念を催し、懐古の情に耽る邊がない。これがルソーの墳墓である。あれがヴォルテールの墳墓である。こゝにユーゴーが眠り、そこにゾラが

塑像
土で造つた
徂徠
ゆきき。

墳墓
はか。
洞窟
ほらあな。
觀覽者
見物人。
ルソー
英國の哲學者。
(1712—1778)
ヴォルテール
英國の文學者。
(1694—1778)
ユーゴー
英國の思想家、詩人。
(1802—1885)
ゾラ
法國の小説家。
(1840—1902)

眠つてゐるといふかと思へば、はや先頭は他の場所へと進むので、何一つとして頭に残りやうがない。もうお仕舞だと見えて、そこに出口がある。戸の外に例の案内者が立つて、銘々から思召の金を貰つてゐる。皆が金を遣



ンオテンバ

ると、どうんと戸を閉めて錠を卸す。それでお仕舞である。次にはまた何十人かの見物客を引連れて、同じことを繰返す。此の如くにして、案内者のポケットは相當に膨れるだらう。私は敢て一フランや二フランの金を惜しいとは思はぬが、何遍はひつても同じことだから、パリには七十日もゐたけれど、二度とこゝにはいかなかつた。

このパンテオンには、嘗てミラボーが國葬にされた。しかるに、その國葬が營まれてから僅か三年目に、議會では、彼の骸骨を掘り返して、その代りにマ

フランの貨幣の單位の名、凡そ我が三十八錢七厘に當る。
ミラボー
佛國革命時代の雄辯家。(1764-1793)
マラー
佛國の革命家。(1744-1793)

ラーを葬ることを決議した。かくてミラボーの死骸は、或夜このパンテオンから他の或墓地に改葬された。マラーが暗殺されたことは、當時甚しくパリ人の血を涌かせたものと見える。しかるに、このマラーの死骸も、三箇月目にまたこゝを追ひ出されて、他の墓地に埋められることになつた。えらいことをしたものだ。しかし、それがパリ人であり、それがパンテオンであるのだ。

考へて見れば、このパンテオンの墳墓室は、やはり例の案内者について、出来る限り速しく見て廻るべき場所なのである。堂前に建てられてある「考へる人」と題するロダンの作品は、裸體の男が左腕を膝に突き掌を以て額を支へてゐる銅製の巨像であるが、背面の建築とはいかにも不調和に見える。しかし、パンテオンの歴史、パリの歴史、隨つてフランスの歴史を知るものにとつては、このロダンの作品こそ、替へも動かしもならぬパンテオン堂前の闕くべからざる裝飾である。

ロダンの佛國の彫刻家。(1840-1917) 裸體はだか。

七 飛行機

石川啄木

見よ 今日も かの蒼空あざぞらに 飛行機の高く飛べるを
 給仕づとめの少年が たまに非番の日曜日
 肺病やみの母と たつた二人の家いへにゐて
 ひとりせつせとリーダーリーダーを獨學どがくする眼まなこのつかれ
 見よ 今日も かの蒼空あざぞらに 飛行機の高く飛べるを

石川啄木
 岩手縣の人、
 文學者、明治
 年四十五年
 年二十七
 年七

新編女子國語讀本卷七終

同字一覽

こゝに同字といふのは、一般に略字・俗字・訛字・同字・慣用字などといつてゐるもの一切を包括したものである。
 *印の附けてゐるのは、元來別字であるが、今日は同字として廣く用ひられてゐるものである。

但*仍 垂 互*貳 乱 乘 舟 丑 丈 申*參 壹 兩 万	但 仍 亞 互 二 亂 乘 世 丑 丈 弗 三 一 兩 萬
並 全 令 今 會 今 傲 假 仏 僭*体 倚 働 俟 倭	並 全 令 今 會 今 傲 假 仏 僭 體 倚 働 俟 倭
竝 同 令 今 會 傘 傲 假 佛 僭 體 倚 傲 埃 倭	竝 同 令 今 會 傘 傲 假 佛 僭 體 倚 傲 埃 倭
涼 準 况 決 冥 富 胃 冊 口 兎 免 京 内 亡 辛*	涼 準 况 決 冥 富 胃 冊 圓 兎 免 京 内 亡 辛
涼 準 况 決 冥 富 胃 冊 圓 兎 免 京 内 亡 辛	涼 準 况 決 冥 富 胃 冊 圓 兎 免 京 内 亡 辛
勲 勞 効 効 剗 剗 劔 別 刈 剪 刃 函 凡 冲 滅 滅	勲 勞 効 効 剗 劔 別 刈 剪 刃 函 凡 冲 滅 滅
厨 悞 卒 卑 兼 區 疋 却 即 如 勺 勅 勢 勸 勵	厨 悞 卒 卑 兼 區 疋 却 即 如 勺 勅 勢 勸 勵
厨 協 卒 卑 兼 區 匹 卻 即 卯 勺 勅 勢 勸 勵	厨 協 卒 卑 兼 區 匹 卻 即 卯 勺 勅 勢 勸 勵
圖 團 口 囗*囗 器 唇*叙 叟 収 双 厚 厨 厨 厨	圖 團 國 四 回 器 唇 敘 叟 收 雙 厚 厨 厨 厨
圖 團 國 四 回 器 唇 敘 叟 收 雙 厚 厨 厨 厨	圖 團 國 四 回 器 唇 敘 叟 收 雙 厚 厨 厨 厨
塩 場 坂 菅 善 員 詠 含 呈 告 吉 去*叫 嚙 叶	鹽 場 坂 菅 善 員 詠 含 呈 告 吉 云 叫 嚙 協
鹽 場 坂 菅 善 員 詠 含 呈 告 吉 云 叫 嚙 協	鹽 場 坂 菅 善 員 詠 含 呈 告 吉 云 叫 嚙 協
嫉 妊 妍 姬*奧 弊 弊 犇 犇 奇 夾 夢 彡 壯 墻 塚*	嫉 妊 妍 姬 奧 弊 弊 犇 犇 奇 夾 夢 彡 壯 墻 塚 塚
嫉 妊 妍 姬 奧 弊 弊 犇 犇 奇 夾 夢 多 壯 墻 塚	嫉 妊 妍 姬 奧 弊 弊 犇 犇 奇 夾 夢 多 壯 墻 塚
届*并 帽 对 尋 尅 寫 害 賓 寶 突 寇 孛 嫩	届 并 帽 對 尋 尅 寫 害 賓 寶 實 寇 孛 嫩
届 并 帽 對 尋 尅 寫 害 賓 寶 實 寇 孛 嫩	届 并 帽 對 尋 尅 寫 害 賓 寶 實 寇 孛 嫩

肅 戶 聽 聯 聾 耻 羨 群 羨 羈 罰 繩 綃 繼 糸 練 帛 緝 總 綱

肅 聲 聽 聯 聾 恥 羨 羣 羨 羈 罰 繩 綃 繼 絲 繼 紙 祿 總 綱

萼 萌 莽 蔭 荒 花 船 艷 舍 館 舖 台 致 臥 腦 胃 胃 膝 腸 脉

萼 萌 莽 蔭 荒 華 船 艷 舍 館 舖 臺 致 臥 腦 胃 胸 膝 腸 脈

蠅 蚤 蚤 蚤 蛭 虫 蜈 蝗 虱 蚩 蚤 虜 虛 處 虜 虜 虜 虜 虜 虜 虜 虜 虜

蠅 蚤 蚤 蚤 蛭 虫 蜈 蝗 虱 蚩 蚤 虜 虛 處 虜 虜 虜 虜 虜 虜 虜 虜

詔 詛 詭 護 証 証 訟 託 託 託 託 託 託 託 託 託 託 託 託 託 託

詔 詛 讀 謹 證 訟 託 託 託 託 託 託 託 託 託 託 託 託 託 託

章 軌 軛 軛 軛 軛 軛 軛 軛 軛 軛 軛 軛 軛 軛 軛 軛 軛 軛 軛

章 軌 軛 軛 軛 軛 軛 軛 軛 軛 軛 軛 軛 軛 軛 軛 軛 軛 軛 軛

釈 采 配 醫 隣 鄉 郎 撰 遊 逸 迄 迄 迄 迄 迄 迄 迄 迄 迄 迄

釈 采 配 醫 鄰 鄉 郎 選 遊 逸 迄 迄 迄 迄 迄 迄 迄 迄 迄 迄

雞 襍 雉 雁 雁 雁 雁 雁 雁 雁 雁 雁 雁 雁 雁 雁 雁 雁 雁 雁 雁

雞 雜 雖 鴈 陀 陰 隙 隔 隔 隔 隔 隔 隔 隔 隔 隔 隔 隔 隔 隔 隔

鱉 魚 鬱 鬪 鬪 鬪 鬪 鬪 鬪 鬪 鬪 鬪 鬪 鬪 鬪 鬪 鬪 鬪 鬪 鬪 鬪

龜 龍 齡 齒 齋 齊 鼠 鼓 鼉 黃 麻 麵 麥 燕 廉 廉 廉 廉 廉 廉

龜 龍 齡 齒 齋 齊 鼠 鼓 鼉 黃 麻 麩 麥 麗 龜 鹿 鶴 鷺 烏 烏

御 徑 微 往 彥 彝 彙 彎 彌 強 菴 康 崑 崑 崑 崑 崑 崑 崑 崑

御 徑 微 往 彥 彝 彙 彎 彌 強 庵 康 巖 崖 島 峰 峨 嶽 屢 屬

拘 戲

拘 戲

旨 晉 昂 昂 昂 昂 昂 昂 昂 昂 昂 昂 昂 昂 昂 昂 昂 昂 昂 昂

旨 晉 昂 昂 昂 昂 昂 昂 昂 昂 昂 昂 昂 昂 昂 昂 昂 昂 昂 昂

深 条 栖 朴 樾 樾 樾 樾 樾 樾 樾 樾 樾 樾 樾 樾 樾 樾 樾 樾

染 條 棲 樾 樾 樾 樾 樾 樾 樾 樾 樾 樾 樾 樾 樾 樾 樾 樾 樾

气 水 毒 穢 殛 殛 殛 殛 殛 殛 殛 殛 殛 殛 殛 殛 殛 殛 殛 殛

气 冰 毒 穢 殛 殛 殛 殛 殛 殛 殛 殛 殛 殛 殛 殛 殛 殛 殛 殛

熔 餞 沢 濕 浜 澁 湖 漆 湧 洒 恣 沒 淵 汨 淺 温 汗 潛 澗 涅

熔 焔 澤 濕 濱 澁 泝 漆 湧 灑 法 沒 淵 淚 淺 温 汚 潛 闊 涅

留 焔 丁 環 玕 猷 猷 猷 猷 猷 猷 猷 猷 猷 猷 猷 猷 猷 猷 猷 猷

留 焔 叮 瑣 珍 獻 猷 猷 猷 猷 猷 猷 猷 猷 猷 猷 猷 猷 猷 猷 猷

祓 祓 祓 祓 祓 祓 祓 祓 祓 祓 祓 祓 祓 祓 祓 祓 祓 祓 祓 祓

祓 祓 禮 穎 研 礙 確 眈 眈 看 睹 盡 盜 癡 癡 癡 癡 癡 癡 癡 癡

紮 纏 織 紀 枇 穀 糧 筭 籥 笑 竅 竅 竅 竅 竅 竅 竅 竅 竅 竅

糾 纏 織 紀 麩 穀 糧 筭 籥 笑 竅 竅 竅 竅 竅 竅 竅 竅 竅 竅

別字一覽

左の文字は全然別字である。*印を附けた文字は今日同字として廣く用ひられてゐる。

互 ^イ わたる	巨 ^{クワン} 櫃に同じい	屈 ^{クワン} あな	屈 ^{クワン} とく	西 ^{サイ} にし	冠 ^{クワン} かんむり
体 ^イ あら	體 ^{タイ} からだ	易 ^イ かはる	易 ^イ 陽の古字	証 ^{セイ} あさむく	槍 ^{セウ} やり
但 ^イ たゞし	但 ^イ 拙い	刺 ^イ さす	刺 ^イ もとる	証 ^{セイ} いさめる	浙 ^{セツ} 江の名
階 ^イ みだり	僭 ^{ケン} 身分を越え	糾 ^{キウ} あさなふ	糾 ^{キウ} 告げる	*豊 ^{ヘイ} 禮の古字	陝 ^{セツ} せばい
刃 ^イ やいば	刃 ^イ きず	台 ^{タイ} 星の名。敲	臺 ^{タイ} うてな	迄 ^チ まで	俳 ^{ハイ} たはむれ
又 ^イ こまぬく	又 ^イ 爪の古字	壺 ^コ つぼ	壺 ^コ みち	追 ^{ツイ} 行く	後 ^{コウ} のちうし
*逆 ^{ギャク} ちふ	云 ^{ウン} いふ	糸 ^{イト} 細い糸	糸 ^{イト} いと	蚪 ^{トウ} おたまじ	班 ^{ハン} わかつ
支 ^シ うつ	支 ^シ さいふ	頤 ^イ みる	頤 ^イ おとがひ	蚪 ^{トウ} やかし	新 ^{シン} 欣に同じい
支 ^シ うつ	支 ^シ さいふ	賣 ^{バイ} うる	賣 ^{バイ} てらふ	妹 ^{イモ} いもうと	商 ^{ショウ} あきなふ
支 ^シ うつ	支 ^シ さいふ	疆 ^{キヤウ} つよい	疆 ^{キヤウ} さかひ	門 ^{カド} かど	祇 ^キ 地の神
支 ^シ うつ	支 ^シ さいふ	鍊 ^{レン} くさび	鍊 ^{レン} きたふ	券 ^{ケン} わりふ	羨 ^{セン} 地名
支 ^シ うつ	支 ^シ さいふ	製 ^{セイ} かされころも	製 ^{セイ} ふだんぎ	*姫 ^{ヒメ} つゝしむ	鍛 ^{タン} きたへる
支 ^シ うつ	支 ^シ さいふ	月 ^{グツ} つき	月 ^{グツ} 肉つき	*担 ^{タン} あげる	藉 ^{セキ} 席
支 ^シ うつ	支 ^シ さいふ	*歌 ^カ なげく	*鼓 ^コ そだつ	改 ^{カイ} のち	*選 ^{セン} えらぶ
支 ^シ うつ	支 ^シ さいふ	*虫 ^{チュウ} 介の鳩稱	*蟲 ^{チュウ} むし	負 ^フ おふ	郤 ^{キョク} ひま
支 ^シ うつ	支 ^シ さいふ	傳 ^{デン} かしく	傳 ^{デン} つたへる	苗 ^{メウ} なへ	塚 ^{ツカ} ちり
支 ^シ うつ	支 ^シ さいふ	塚 ^{ツカ} たすけ	塚 ^{ツカ} たるき	段 ^{ダン} きれ	母 ^ボ なけれ
支 ^シ うつ	支 ^シ さいふ	登 ^{トウ} たかつき	登 ^{トウ} のぼる	欠 ^{ケツ} あくび	己 ^キ おのれ

大正十一年十月二十七日
大正十一年十月四日
大正十一年一月七日
印刷發行
再版發行
再版發行

新女子國語讀本	定價	大正十三年
卷一—四	金四拾參錢	金七拾七錢
卷五—十	金四拾錢	金七拾二錢

大正十四年度臨時定價
金七拾貳錢

有所權著作



著者
發行者兼
印刷者

西部販賣所
東部販賣所

東京開成館編輯所

株式東京開成館
代表者 渡邊良助

三木佐助

林平次郎

發行所

東京市小石川區小日向水道町八四
振替貯金口座東京第五參貳貳番

株式東京開成館

四年口組

田

坂

三

年

口

組